ゼロと創造の使い魔

神埼直人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゼロと創造の使い魔

【Ｎコード】
Ｎ８５３６Ｓ

【作者名】
神埼直人

【あらすじ】
この日、澄み渡る青空の下トリステイン魔法学院では春の使い魔召喚の儀式が行われていた。
生徒たちが各々自分の使い魔と戯れている中、今日何度目かの爆発音が響いた。
何回も失敗を繰り返した少女が召喚した使い魔は
「創造神」のフレイムヘイズ　坂井悠二だった――――！

第一話〜〜プロローグ

この日、澄み渡る青空の下トリステイン魔法学院では春の使い魔召喚の儀式が行われていた。
生徒たちが各々自分の使い魔と戯れている中、今日何度目かの爆発音が響いた。

「ミス・ヴァリエール、もし次の召喚に失敗してしまったら今日はもう終わりにしましょう。明日もあるんですから大丈夫ですよ」
禿頭が眩しい教師コルベールが言う。
彼自身としては、全ての生徒たちが無事に使い魔を召喚して終わりにしたいと思っている。
しかし、ただ一人の生徒のためだけにあまり時間を使ってもいられない。
彼としては、これが最大限の譲歩であった。

「……はい。わかりました」

ただ一人使い魔を召喚できていない桃色の髪の少女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは落ち込んでいた。
いままでは魔法が使えずゼロのルイズと馬鹿にされていたが、今日は誰にも負けない使い魔を召喚しようと意気込んでいた。

しかし実際、使い魔も召喚できない本物のゼロではないか。
やはり自分には魔法の才能がないんだ。と、既にルイズは半ば諦めかけていた。

「ルイズ、がんばりなさいよー」
遠くからキュルケの声援が聞こえてくる。

（いいえ、これは声援じゃないわ。
憎きツェルプストーめ、あんたの前ですっっっっごい使い魔召喚してほえ面かかせてやるわ。
そうよ、私は出来るのよ。ううん、違うわルイズ。できる、じゃなくてやるのよ。
さあ、今に見てなさい。驚いて腰を抜かしても知らないんだから！）

「宇宙の果てのどこかにいる私の下僕よ！　神聖で美しく、そして強力な使い魔よ！　私は心から求め、訴えるわ！　我が導きに応えなさい！」
いままでよりも一際大きな爆発音が鳴り響いた。
立ち上る土煙の中、ルイズは今までにない手ごたえを感じ、成功を確信していた。
しだいに土煙がはれ、使い魔の正体が明らかになっていくと周囲の疑念の声は嘲笑になった。

土煙の中心にいたのは、一人の少年だった。

「ゲホゲホ、なんだ??」

周囲を見回してみると、奇妙な格好をした同年代の少年少女たちや、ゲームや漫画でしか見たことがないような生き物がいた。
周りの少年たちの顔立ちを見ると外国人のようだ。
それにみんなマントのようなものを身に着けているのでどうやら学校か何かのようだった。
戦闘体勢の人もいないようなのでひとまず敵ではないようだ。

周りからは明らかに馬鹿にした笑い声が聞こえてきた。
まだ警戒はしているが、気分のいいものではなかった。

「あんた、誰?」
目の前にいた桃色の髪の少女に話しかけられた。

「……誰って、僕のこと?」
「あんたに話しかけてるんだからそうに決まってんでしょ。まあい

いわ、あんた変な格好してるけど平民ね」

悠二が答える前に、目の前の少女が矢継ぎ早に話し始めた。
悠二自身は、ジャケットに厚手のズボンだったので変という格好ではないと思った。
季節にあってはいないようだったがそれはこの際どうでも良かった。

第一話〜〜プロローグ（後書き）

次は人物紹介です
見てやって下さい

第二話〜〜人物紹介（前書き）

予定通りの人物紹介です。

第二話〜〜人物紹介

「創造神」‘‘祭礼の蛇’’のフレイムヘイズ

坂井悠二

（性格）

性格は基本的には大人しめ。しかし怒るべきところでは怒る、人並みの義憤心や我侭さや自尊心は持つ。
好物はチョコレートで、嫌いな物はマシュマロとセロリ（特にセロリは口にすると凄い顔になるらしい）。利き足は右。
但し恋愛に関してはかなり優柔不断であり、なおかつ微妙な女心に鈍い。
その理由は、坂井悠二の本質は『感情』の面には無い特殊な人格の持ち主（つまり平時には平時の、危機には危機の常時対処している）であるために、日常における感情で対処するべき恋愛などに大変に疎く、鈍感なのである。
幾度かの戦いを経て、訓練の賜物か、はたまた戦いの経験からか、貫禄が立派についてきた。

火避けの指輪『アズュール』　片手持ちの大剣『吸血鬼』を武器として使う

創造神　「祭礼の蛇」

悠二と契約している紅世の王、悠二が戦うもしくは、大量に存在の力を行使するときに力を貸す。
意思を表出する神器は、銀の鎖で繋いだ金の球を、交差する黒のリングで結んだ意匠のペンダント
本作ではアラストールのような遠雷の轟くような声で話す。重厚というに相応しい厳しく威厳に溢れた性格だが、割と世話好きな面を持ち、女性に対して押しが弱い、都合の悪い話には「むむむ」と唸ることしか出来ない、かなり似た性格になっている。

ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール

桃色がかったブロンドの長髪と鳶色の瞳を持つ、ヴァリエール家の三女で１６歳。比較的に小柄である為、スタイルの良い同性に対してコンプレックスがあるが、腕っ節は強い。１６歳で、身長が１５３サントでスリーサイズがＢ７６／Ｗ５３／Ｈ７５。華奢という点では素晴らしい体格であるが、ハルケギニアでは余りそのような価値観はないらしく、「１６歳であれはない」との酷評もあり、本人もかなり気にしている。

第三話〜〜契約（前書き）

久しぶりですいません
ではどうぞ

第三話〜〜契約

「僕の名前は坂井悠二」
とりあえず自分の名前を言ってみることにした、それから質問をしてみようと思った。
「ユージ？ヘンな名前ね。」
「そうかな？」
どこの国だよここは・・・・。
「こっちからも質問していいかな？」
「ええいいわよ。」
「どうやって僕を呼んだんだい？」
「サモンサーヴァント、使い魔の召喚よ。」

何だそれ？そんな自在法あったっけ？
（ないな。）祭礼の蛇が答えた。
蛇が知らないってことは・・・・
「ここどこだい？」
「トリステイン魔法学校よ。」
「それってどこのーー「すまないが質問は後にしてくれるかな？」
「すいません、ミスタコルベール。」
いや、ちょっとまってくれ。
「では契約を早くすましてくれるかな、もう終礼の時刻だ。」
「いやだから・・・」
「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。
　五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」
彼女・・・ルイズの顔が近づいてきた。
よけようとしたときにはもう遅かった・・・・

唇と唇が――――重なった
――――瞬間右腕に痛みが走った。

「あいた!?。」
右手、右手の甲あたりに文字が出てきた。
「ちゃんと契約が終わったらしいですね、では今日の授業は終了。」
（これはどういうことだ）
しらないよ・・・
どうやってここに来たんだろう。
考えるにしても情報が足りないな・・・
（ならば、そのミスタコルベールとやらに聞けばいいのではないか？）
だね・・・
自分のパートナーと相談しやるべきことを決めた。
「えっと、ルイズ・・・だっけ？」
「ええ。」
「いろいろ話したいけど、先にやることができたから、行ってきていいかな？」
「ええ、いいわよ。もうすぐご飯だから遅れないようにね。」
「了解」

「――――先生。」
「なにかね、えっと名前は？」
「悠二です。」
「よろしくユージ君、わたしはコルベールだ。」
「いくつか質問があるんですが・・・」
「そのようなことを言っていたね。いいだろう、何でも聞いてみてくれたまえ。」

いろいろな質問をしてだいたい理解することができた。

この国がトリステインということ、そしてここは貴族(メイジ)要するに魔法使いを
育てる学校ということ、呼び出した方法はサモンサーヴァントという儀式、契約とは
対象を使い魔にするということ。他にもいろいろ聞いたが結局帰る方法は皆無のようだ。
とは言っても「創造」で「神門」と似たようなものを作りかえることはできるだろうということ。

（出来るだけ早めに「門」を作らないとな）

第三話〜〜契約（後書き）

悠二は祭礼の蛇の力を、
ある現象が起こったときに行使できます。
それはいずれ本編で・・・・

第四話〜〜ご主人さま

悠二はルイズの部屋に戻ってきた。
「どこ行ってたのよ・・・。」
う、何か怒ってるし・・・

「ごめんなさい」

「まぁいいわ、で話って何？」

「うん、まずは使い魔って何すればいいの？」
「使い魔は、ご主人様の目となり耳となり、そのほか色んな世話をするのよ。」
「ふぅん、それは創れるな。」

ルイズが眉をひそめ、言う。
「創るって何よ？」
「ん、まぁそれはあとでね。」
「で？」

「で、ってなによ？」
「他には？」
「ご主人様の身を守る、でもあんたできなさそうだし。」
ちょっとなめられてるような・・・

「ククククク」

「ヒャァーーー！？」
「あ、ごめん忘れてた・・・・。」
「だだだ、誰の声？？」
心底びっくりしたな・・・。
「あ～、こいつは‘‘祭礼の蛇’’。」

「で？そのさいなんちゃらってなによ？？」
首からかけたペンダントが話だす
「端的に言うと仮想意思表示体・・・つまりこれに精神のみ憑依させているのだ。」
「？？」
「あ～。だからこの世界で言うマジックアイテムとかいうやつだよ。」
「ふうん、でも何で憑依しているの？」

説明するにしても面倒だな。
「まぁそれは後々言うよ、一応みんなには言わないでね。」
「・・・・まぁいいわ。」
良かった・・・。
「うん、ありがとう」
またペンダントが言う。
「娘。」
「ひゃ！？」
「怖がらなくていいよ。」

「ここっこ、怖くなんかないわよ。」

うそつき。

「ふぅん、そうか。」

「娘よ、有事の際には余が力を貸す、その力でそなたを守ってくれよう。」

「あ、うん、ありがとう・・・ってなんで私が礼を言うのよ！？」

「それと・・・」

「あによ？」

「お世話のほうはこいつがするよ。」

言って悠二は前に手のひらを上にして伸ばし

ッボ！・・・黒の炎がともる

「あ、あんた魔法が使えるの？」

「似て非なるものだ。」

悠二はその火に向かって

フゥッーーー

そしてその炎はゆっくり下に落ちていく・・・

「えっ？」

炎は見るみる形を変えていき、人の形となった。

「はじめまして！お世話係担当のシイです！」

「というわけでよろしく。」

「どういうわけよ！？」

「私は悠二さまの分身のようなものでございます、お気になさらないよう。」

「そいつは部屋の掃除、洗濯、君の世話のだいたいをしてくれるよ。・・・でも戦闘向きじゃないから気をつけてね。」

「分身って何なの！？あなたいったい何者なのよーーーーーー！！！」

第四話〜〜ご主人さま（後書き）

悠二が“燐子”を出しましたね。
設定はまたあとで。

第四話ＥＸ〜〜二人（前書き）

今回はシャナの悠二が消えた後の行動を書いています

第四話EX〜〜二人

「アラストール、こんなことありえる？」
「ありえるはずがなかろう・・・」

二人は悠二が消えた後
「外界宿（アウトロー）」や個人的な情報をもってしても悠二の足取りすらつかめなかった

「そもそも、悠二も腕は上がってるのよ？簡単には捕まらないはず・・・
罠で捕らえるにしても、そういうのにはよく頭回るのに・・・」
「可能性としてはどちらもある、狙う奴も多数おる。」

祭礼の蛇との契約後、
紅世の王や徒に目をつけられていたが、天罰神とその契約者が付いているため、
表だって狙われることはなかった

（悠二がやられたら・・・
だめだめ、信じるのよ！それに創造をつかえばどんなところにいたって戻ってくるはず。）

そのころのとある魔法学院の塔の上・・・・
（シャナ探してるんだろうな、はやく「門」あけないと！）

なんだかんだと
わかりやってる二人であった…

第四話ＥＸ〜〜二人（後書き）

どうでしょうか
悠二はシャナと再び会うことができるのか
お楽しみに！

第五話〜〜メイドとの出会い（前書き）

三人に見られてることにきずく
これからもどうか感想よろしくお願いします

はずかしながら『』
これの出し方がわからないのです。

え、今出せてるじゃんだって？
それはコピーしてくっつけるをしたからです。。

第五話〜〜メイドとの出会い

チュンチュン・・・・
スズメかと思ったけど・・・
何かわからないよねこの世界の鳥の名前なんて

『ああ、起きたのか』
胸のペンダントがしゃべる・・・・よく似てるよなーアラストールの神器に。
黒の玉に金の輪をまいたのがアラストール
金の玉に黒の輪が蛇・・・
うん考えるのやめよう。

「さって朝の散歩っと。」
とか言いつつ窓から飛び降りる。
すかさず飛行の自在式を発動・・・減速しつつ降りていく。

降りた先には…
いわゆるメイドがいた、

「きゃあああああーーーー?」
「ぎゃあああああーーーー!?」

そんあこんなでメイドさんが落ち着いてたところで話し出す。
（飛んでるの見られたな・・・どうしようかな・・・。）

（愚か者。）
蛇から厳しい言葉が・・・。
メイドさんは黒い髪で少し日本人みたいな懐かしい感じがした。

「おちついたかな・・・？。」
「あ、え、あ・・・、はい。」

（いきなり飛んできたら焦るか・・・）
なんて思ってたら

「あう…洗濯物落ちちゃいましたぁ…。」
「僕も手伝いますよ。」

言うが早い、手伝ってすぐに洗濯物をメイドさんが持ってたかごに入れた

「あ…僕の名前は悠二…君は？」
「あ、はい、シエスタといいます。」
「これからよろしく。」
「はい！こちらこそ。」

そのあと飛んできた理由をごまかすのに四苦八苦した・・・
というのは余談。

第五話〜〜メイドとの出会い（後書き）

どうでしょうか

バラと戦うまでいつまだかかってんだか。。

第六話〜〜バラと口論（前書き）

どうぞ見てやってください
楽しんでくれますよう…

第六話〜〜バラと口論

そんなメイドとの出会いの後、ご主人様の部屋えと戻った
ちょうど自分の燐子シイがルイズの世話をしているところだった。
うーん、らくでいいね。

「あんた使い魔としての仕事やってるの？」
「やることないからね、今は。」

ルイズは何も言い返せないようだった…正論だから。

「おわりましたよー。」
「ありがとう。」

シイも髪溶くの終わったようだし

「ご飯食べに行くわよ。」
「了解。」
「いってらっしゃいませ。」
ペコっとお辞儀してシイが言う。

「なんで付いてこないのよ？」
「昨晩説明したよね…、燐子は作った本体から力の供給を受ければいいの。」
「わかってるわよ。」

…うそつき。
でもしかたない自分も最初シャナに説明されたとき理解が追い付かなかったし。

そして食堂へ、
（ん、騒ぎが起きてる？）
（中心にいるのはシエスタという娘ではないか？）

「君には、貴族に対する礼というものがないようだね。」
「す、すいません。」

近くの生徒に聞いたがどうやら、シエスタが落とし物を届けただけで怒られているらしい。
正確には落とし物が二股をかけてた女の子からのプレゼントで、届けたときにもう一人の方に問い詰められ、二股がばれ、横っ面張られたらしいが。
よくみるとかれの左ほお、見事に真っ赤。

（まぁ、いいや止めよう。聞く限りシエスタ悪くないし）

「やめてくれない？」
「な、何だね君は？」
「僕はルイズの使い魔だよ。」
「ああ、あの平民か・・。」

ここはどこの国ですか。あ～これ前にも言ったような気がする…。

「聞く限りではきみは、二股がばれて殴られたらしいけど？」
「それはこの平民がいらないことをするから！」
「それってやつあたりだよ？貴族ってそんな人のことを指すのか？」
「ぐっ。」

「君が二股かけなければ済んだ話だろう・・・、バカみたいなことで人の友達に八つ当たりするな。」

すると金髪の少年が顔を真っ赤にして、

「決闘だ！」

まわりから本気か、だの、やれやれーだのはやし立てた声が聞こえる。

「ここって決闘禁止じゃなかった？」

「平民と貴族の決闘は禁止されていない。」

「あっそ・・・、べつにいいよ。かかっておいで。」

「く～。どこまでもばかにして…」

というわけで決闘することになりましたー。

（あ～、いみないのになぁー、軽くおしおきと行きましょうか…。）

第六話〜〜バラと口論（後書き）

みられてるって少し元気が出るね
次回はバラとの決闘です。

第七話〜〜バラとの決闘（前書き）

見てくれてありがとうございます＾＾
では決闘です、どうぞ。

第七話〜〜バラとの決闘

どうやら学園内にある広場らしき場所で決闘するようだ
（あほらしくてやってられない…。無意味すぎる。）
（貴様が煽るからだろう。）
（厳しいこと言うねー。勝手に逆上したのあっちだよ…。）
その広場に案内してもらってる途中近寄ってきたルイズが
「今ならまだ間に合う今すぐ謝りなさい。」
「なんで？」
「平民は貴族に勝てないの！すぐに謝って許してもらいなさい！」
「あ〜、ごめんね、僕ね、人とかそういうのでないから勝つよ。」
「え、ちょーーーっ？？」

ワーワー騒いでる、あそこか。
（すぐおわらせよう、めんどくさい。）
そんな事を思いつつ騒ぎの方向へ速足で向かっていく。

「「「「おおー！きたぞー。」」」」
「逃げずにきたのかい？」
「当たり前…というかなんで逃げなきゃいけないのかもわからない」
「ぐ・・。謝ったら許してやるぞ。」
「君が謝ってね、シエスタに。」
顔を真っ赤にした少年が叫ぶ

「もう謝っても許さないからな！！！」
「ごめん、名前を教えてくれるかい？」
「ギーシュ・ド・グラモンだ。」
「僕は悠二よろしくね。」

「始めようか…。」
言った瞬間悠二の目つきが変わる、鋭くそして、その体からは殺気があふれていた。

「ぐっ、ばかにするなーーー！！！」

ギーシュは叫んだあと荒々しく杖をふるうそうすると
なにか人形みたいなのが出てきた…
ギーシュは得意げだがそれを見ても悠二は
（力弱いなあの人形…素手でたたき壊したらみんな疑うだろうから
ここは…）

悠二は自分の右手を体に平行に伸ばすに、
その右手には大剣『吸血鬼（ブルドーザオガー）』が握られていた。
そんなことするだけで疑われることを考えてないことから、悠二は抜けているのだ…

剣の切っ先をまっすぐ前にむける。

「かかってこい。」
「ぐう。」

ギーシュは杖を振り下ろした
そのつくられた人形をこっちにはしらせる…が。

人形はきづけば粉々になっていた。

ギーシュは困惑する、なぜばらばらになったのか
すべてがわからなかった

答えは単純、悠二が切ったのだ、だが…切るスピードが速すぎてまず見えてる人がいないのだ
根本的な種族の違いがここではっきりとしていた。

ギーシュは再度杖をふる
今度は人形が六体
何かの間違いだというように人形を向かわせる、が結論は同じ、しかも…
人形がばらばらになった後、ギーシュの首元に剣が突き付けられていた

そして…周りが茫然とする中決着がついた…

悠二はきずいていた、見られていることに
（…誰かが僕を見ている？何の魔法だ？殺気はないようだけど）
（油断するなよ…）

第七話〜〜バラとの決闘（後書き）

どうでしょうか？
キュルケの絡みいれるか・・・
あーーーーなやむw
感想に意見書いてください

第八話〜〜虚無の曜日（前書き）

あああああああキュルケのキャラうまくかけないいいいwwwww
すいませんいつかＥＸ（主にタバサ、キュルケ、シャナなど）でやりますね
ではどうぞ＾＾；

第八話〜〜虚無の曜日

今日は虚無の曜日…いわゆる日曜日かな？
ご主人様が服を買いに行くとかでついてきたわけですが…
道が狭い、うん狭い
道幅五メートルあるぐらいしかない
で、ここがトリステインでかなりにぎわってる町だから、人とぶつかりまくるわけで…。

「この町、すりの頻度絶対多いよね。」
「取られないように気をつけてね。」
「警備考えてよ、なんか魔法つかってくるバカがいるんですが…。」
「まさかとられた！？」
「いやいや。」

悠二は前まで自分の中にあった『零時迷子』の能力により以上に力の動きに鋭い。
余談だが、ギーシュの人形（ワルキューレだが名称知らない）はマリオネットみたく関節に魔力の糸があって、ギーシュのバラ（杖）につながってるのが見えた。

「で、あとどうするの…？出来ればかえりたいんですが。」
「忘れてたんだけど使い魔の品評会があって・・、あんたなんか芸できる？」
「あー、魔力の流れが見えるとか、人の力じゃ、手にもてないようなもの持つとか？」
「なにその力、わけわかんないわね。」

（説明したような気がする～、古いか。）

「まぁ、今晩ちゃんと説明するよ。」
「わかったわ、夕食はここで食べて帰りましょうか…。」
「りょーかい。」
（どこまで狭いんだ…、これで大きい方ねぇ…）

すごく日本が恋しくなった、悠二であった。

第八話〜〜虚無の曜日（後書き）

悠二の能力からすると、そう見えると思うんですよね
所詮は人形、各所に力を通さないと動かないでしょうし…
みなさんはどーおもいますか？
こういうとり方でいいでしょうか？

第八話ＥＸ～～図書館、青髪の少女と出会う（前書き）

話に直接関係あるかは全く不明
まぁほのぼのばなしです
ゆったーりしていってくださいな＾＾

第八話ＥＸ～～図書館、青髪の少女と出会う

ご主人様が一人でどこかに行ってしまったので、図書館に来てみた…
『達意の言』があるとはいえ、文字には不安がある…来てみたはいいけど。
本がいっぱいあって、どれがどれか全く分からないね。
簡単な本もここからどう探せるんだって言うぐらい本がある。
１０万３０００冊ぐらいあゲフンゲフン

というわけで入ってすぐ目に付いた女の子…青い紙、青い目、小柄な体、
杖というかいわゆるワンドだろうか、まぁ彼女の身の丈ほどもある長い杖だ。

「こんにちは。」
「……なに。」
(う…なんだこの大切な時間を邪魔した感)
「あー、僕はねルイズの使い魔で悠二っていうんだ。」
「……で、なに？」
(怖いよこの子！？)
「実はこっちの文字を覚えたくて…、簡単な本が欲しんだけど、どれがいいかなぁーって。」
ガタッ
(あーどこかいったか…)
なんて思ってたら戻ってきた。
「これ簡単だから読むといい。」
「あ・・・ありがとう。」

『達意の言』発動っと・・・
題名を見てみる・・・童話か、うん、ちょうどいいや

「ごめんね、もう大丈夫だと思う、君の名前は？」
「……タバサ。」
「よろしく、タバサ。」
「……。」
（これは別に拒絶じゃなさそうだね。）

そんなこんなで一時間ぐらい読みふけった後
図書館から出た。

出たときに蛇が言ったんだけど
『あの娘、少し我が巫女ににとらぬか。』
「あー、そうかも。」

雑談を交わしつつ今日も一日過ぎていく……

第八話ＥＸ～～図書館、青髪の少女と出会う（後書き）

ルイズの一人でのお出かけは特に意味はございません！
悠二を一人にしたかったそれだけ。
うん、ゆっくり進もうや
次回もよろしくねー＾＾

第八話ＥＸ２～～夜の廊下、赤い髪の女の子と出会う（前書き）

外伝二つ目ー
うん、何とか二人と合わすことに成功した
こんかいもほのぼのとですよー＾＾

第八話ＥＸ２～～夜の廊下、赤い髪の女の子と出会う

夜、といっても悠二から見てルイズらはかなり早い時間に眠る。
電気ないし、ＴＶとかもありえない、なら必然的にそうなるのだが。
（眠くない、こんなはやくに眠ったことあんまりないしなー）
というわけで夜の散歩、学校の散策に出かけた・・・。
しずかだねー、とか思ってると
まえから赤い髪の女の子…、真っ赤な髪、茶色い肌、色気の含んだ体つき。
そんな女の子が向かってきた

「あら、あなたルイズの使い魔じゃない。」
「しってるの？」
「平民が貴族を倒したーって騒いでたからね。」
「ああ、なるほど。」
「なにしてるの？」
「んー、寝れないから、学校の散策。」
「私が案内してあげるわ…。」
「いや、悪いよ…。」
「眠れないから、別に良いわよ。」
（ならお願いしますか。）
「じゃあよろしく、君の名前は？」
「ツェルスプトー家のキュルケよ。キュルケでいいわよ。」
「わかった、ぼくは悠二だよ。」
「よろしく、ユージ。」
「こちらこそ。」

そんなこんなでキュルケに案内してもらった、大広間や食堂…いったことあるところから
宝物庫などをみたりした。

宝物庫に目を凝らすと力の糸が渦巻いてるように見えた、一点を付いたらすぐ壊れそう。
そんなつまらないことを考えながら、散策は終わった。

「ありがとう、キュルケ。」
「こちらこそ、良い暇つぶしになったわ。」
「「おやすみ。。」」

そして僕らは別れた。
『ベルペオルと似てるような』
「いやそれは無いよ…。」

第八話ＥＸ２～～夜の廊下、赤い髪の女の子と出会う（後書き）

どっかの怪盗が喜びそうなことを一発で見抜く、
さ・・・す・・が？ｗ
では次は本編ですー＾＾

第九話〜〜悠二の力の本質（前書き）

どうかなー字がごちゃごちゃしているＯＴＬ
まぁ楽しんでいってくださいな…

第九話〜〜悠二の力の本質

「それはねー、願いなんだよ。」
「願い・・・？」
「そう、願い。」

虚無の曜日のよる、僕は約束道理自分の力の説明をしている
もとい、自分の経歴や過去についてだ・・・。

「どういうこと…？」

『われは欲望の肯定者だ。』
「いみわかんないわ。」
「僕たちは欲望、みんなの希望や夢それらの願いを聞き入れてうごくんだ。」

「なんとなくわかったけど、なんでそんなことをするの。」
「それは僕らが『創造神』だから。」
「なにふざけた『本当だ』

「僕ら創造神は元の世界であまりあがめられていない。」
『すべての願いを聞き入れ、かなえてみせるからだ』
「要するに、みんなの願い道理に動く駒に似てるかもしれない。」
『だがわれらの存在意義はそれだ』
「まぁ、願いをかなえるための存在、だから欲望の肯定者なんだよ。」

「う～ん？」

「いま、に一度理解しろとは言わないよ。」
『後々、理解していく。』
（混乱するよなー、いきなりこれじゃあ。）

「まぁ明日のためにも寝ときなよ。」
「そう…ね、おやすみ。」
「おやすみ、ルイズ。」

こうしてトリステインの夜は更けていくのであった。

第九話〜〜悠二の力の本質（後書き）

まぁ、みんなが楽しんでるならやりがいがあるから
これからもがんばるよー
応援よろしくー＾＾

第１０話〜〜ルイズの魔法（前書き）

のんびりとした朝、そして…。

第１０話〜〜ルイズの魔法

朝かぁ…
背筋をググーーッとのばす
（ここは空気がきれいだから、きもちいいなぁー）
どこからともなくシイが
「ルイズさん、朝ですよ、起きてください。」
とか言ってるのが聞こえる。
「顔洗ってくるからー、ルイズが起きたら言っといてね。」
「はい、ご主人様。」

窓から前といっしょのように飛び降り、飛行の自在法で減速、着地
横を見たらシエスタがいた、
「おはようございます、ユージさん！」
「おはよう、シエスタ。」
「洗濯物かぁー、いつも御苦労さまだねー。」
「いえいえ。」
「顔洗いたいから一緒に行くよ…。ねむぅ…。。」
「行きましょうか。」

朝はいつもこんな感じで始まっていくのだ。

「今日はルイズの授業についていくよ。」
「いいわよ。」
朝食食べながらたわいもない会話をした。

（そういえば、ルイズの授業ってみるの始めてかな？）

そして始業時間になった…
先生がスクウェアだの、トライアングルだのいってる・・・
まぁ魔法の使えるランクってとこかな？

「土魔法である、錬金術とは～～～～」
とかいってる。
「ではこの石を真鍮に錬金します、よくみててください。」
「『錬金せよ』」

少し目を凝らすとわかる…、
「石の中にある物質自体を別の物質に変えてる…、複雑だなー。」
「よ、よくわかりましたね？」
（しまった、声に出てた…。。）

「では、ミス・ヴァリエール、やってみてください。」
「はい。」

返事をしたときに周りがざわつきだした
「やめておいた方がいいと思います…。」
「なぜですか？」
「え、いや、だって…『やらして下さい』
「どうぞ。」
（なにかあるな・・・？）
ルイズの魔力を見る・・・注意深く。
石に魔力が溜まる、そして物質の変換へ…？
っ？　さっきとながれが違う、なんだ？
！？まさか？？？？
とっさに悠二は防御の自在法を展開した。

直後！

ドカーーーーン！！！！！！！！

爆発が起きた、窓ガラスは割れ、使い魔が騒ぎ出した。

ルイズが涙したのが目に見えたような気がした…。

第１０話〜〜ルイズの魔法（後書き）

はい爆発しましたー。
これって結構つらいんだろーな…。
もう寝るんでまた次回です！＾＾

第十一話〜〜ルーン（前書き）

遅くなりました…ルーンについてです。
どうぞ、楽しんでいってください。

第十一話〜〜ルーン

「あー、ミス・ヴァリエールは部屋の掃除、かたづけをしておくよう。」
「はい…。」

部屋はボロボロになっていた…。
（何だったんだあの爆発、魔法にしては力の流れが無理やりすぎたような。）
悠二は念のため結構本気で防御したのだが、衝撃が自在式を貫いていた。
爆風こそ届いてないが…。

「使い魔さん。」
「はい??」
「他の使い魔が荒れているようです、落ち着かせにいって下さいませんか。」
「はい。」
（いきなりの爆音、まぁ驚くよね。）

広場では主人が自分の使い魔をなだめていた…が。
使い魔の荒れようはものすごい。
主人に攻撃してる者までいた…。
（もはや、完全に野生化してないか？）
梟（フクロウ）の使い魔？だろうか、がこちらに向かってきた。
反射的に止めようとしてつかんだその時。

ルーンからいろんな情報が送り込まれてくる…。
さっきの爆発で混乱してるのがよくわかった。
そしてその梟に軽く手を添える、するとたちまち落ち着いた。
なぜかそうしろと教えられた気がした。
（なんだこの感覚…？）

そのような感じで使い魔に手を添えていき、瞬く間に使い魔たちは落ち着いていった。

（ルーンには特殊な能力をもたらす物もある、ルイズが言ってたのはこれか。）
教えられてはいた…が、実感がなかったので放置していた。
そんなとき、二人の先生が…。

学園長室。

「オールド・オスマン、たいへんです！！」
「なんじゃね？そうぞうしい。」
「こ、これを」
オスマンの目が細くなる

「ミス・ロングビル席をはずしてくれんかね。」
「わかりました。」
いって緑色の髪をした女性は部屋から出て行った。
すぐにオスマンがロック、サイレントをかけた
「神の右手、ヴィンダールブ、すべての動物を自由に操れるという…。ふむう。」
「ミス・ヴァリエールが召喚したのはもしや。」

「間違いなかろう…。彼女は虚無の担い手ということかの。」
「まさか…。」
「たしかに正確ではない、このことは口外禁止じゃ。
使い魔の少年は優しいいい子じゃ、国に渡すことはなかろうて。」
「そうですね、わかりました。」
「様子を見る、騒ぎを起こさぬように頼むぞ。」
「わかりました。」

第十一話～～ルーン（後書き）

悠二は神の右手…ヴィンダールブです
え、なぜかって
イメージガンダールブよりヴィンダールブの方が似合うでしょ
ガンダールブはむしろシャナのはず。

神の右手はヴィンダールブ、心優しき、神の笛～♪

第十二話〜〜悠二の考察（前書き）

結構考えたんですが、やっぱり悠二はヴィンダールブでしょう。
あールイズ誰とくっつけよう？このまま一人？？
悠二はシャナ一筋だし、あああああ・・・
感想にくっつけてほしい人書いてください。

第十二話〜〜悠二の考察

教室で爆発が起こった夜…、
ルイズは自分の部屋で雄二相手に叫んでいた。
何回やっても爆発しか起きないのだと、いくら努力しても何も変わらないのだと、
それを聞いた悠二はただ黙っているだけだった。
（あの力の流れ…、妙だ、不自然に力が爆発…、破壊へと変わっている。）

そう考えた悠二は少し確かめることにした。

翌朝…
ルイズは黙って教室に行った、そのあとを
悠二はついていくことはなく、違う所にいった
コルベールの所である。

コンコンッーーー
コルベールの自室をノックする。
少し遅れてコルベールが出てきた。

「なにかな。君は、ミス・ヴァリエールの使い魔、名前は確かーー」
「悠二です。」
「ああ！そうだ、そうだ…、で何か用かね？」
「すいません少し手伝ってほしいことがあるのです。」
「む？」

悠二が手伝ってほしかったこと、
それはコルベールに『苦手』な呪文
つまり火属性以外の魔法を使ってもらうことだ。
それを四～五回試してもらったが、
みたとこ魔術を発動した後、魔力繰り上げの最中で魔力バランスが崩れ、
結果的に不発するだけだった。
もちろん全部だ。
これにより、悠二は確信する。

ルイズの魔法は『何か』が違うと、『特別』なのだと
もっとも、こんな魔力の違いがわかるのは悠二だけなので誰も他に気づくものはいない、
いや、確信を持てないのだ。

これから数日、図書館で調べ、必要なことを羊皮紙に書きとめていく、
まとめていくと、ある仮説が生まれた。

最後の一文を書き、仮説が出来あがる直前、大きな揺れが起こった

第十二話〜〜悠二の考察（後書き）

悠二、お前…、頭良すぎじゃねw
悠二が羊皮紙にどう書いたか、自分でも気になるんでー
次の話は、外伝、悠二のレポートです
お楽しみに！

第十二話ＥＸ～～悠二のレポート（前書き）

ていうかこの仮設を考えるまで
数日って…
お前は天才か…。

第十二話ＥＸ〜〜悠二のレポート

ルイズの魔法について、悠二がいろいろと考えるために使った羊皮紙、
そこにはこんなことが書かれていた。

「ルイズの魔法について」

ルイズが魔法を使ったとき、大きな爆発が起きた。
それは僕の防御の自在法を貫きそうになるくらい強力なものだった。

『疑問点』
・あの爆発の威力が高すぎたこと。
・失敗したら、誰でも爆発を起してしまうのか。
・魔力繰り上げの際の不自然な魔力の変化

とりあえずこの三点を調べてみたい。

爆発が起こるかどうかについては、
簡単に解決可能。
誰かに頼んでわざと失敗してもらう。
生徒に頼むことはできない、なぜかというと魔法失敗を故意に起こさせるなど、
生徒は意味がないだろう、魔法の無駄づかいとかで、協力しないと思うからである。

協力してくれそうな、コルベール先生に頼むこととする

『結果』
四～五回やってもらったが不発…、爆発は起こらなかった。

じゃあ、あの爆発は一体??
コルベール先生に質問したところ、今の四大属性では爆発を故意に出すのは不可能とのこと。
なら、あの爆発が発生した理由は「違う属性があるから。」
そんな仮説ができてしまった

本で調べたところ、どうやら失われた第零番目の属性、
この魔法を使える人間は歴史上ただ一人しかおらず、もう閉ざされた魔法…。
すなわち、
『　』

ここでレポートは終わっている…。

第十二話ＥＸ～～悠二のレポート（後書き）

んー何というか…。
天才かｗ
次の話は
フーケメインです。
お楽しみに！！

第十三話〜〜フーケ襲来（前書き）

題名の通りフーケがきます。
ではどうぞ。

第十三話〜〜フーケ襲来

図書室でレポートを書きあげる直前

ドカンッ！！！

っという轟音とともにすごい振動が学園を包む・・・・

（なんだ！？こんな揺れ、学園自体をこんな揺らすなんて！？）
悠二は焦って外へ出た、そして見たのは…、

人型の大きい土人形、いわゆるゴーレムである。
肩に誰かのってることから見て、そいつが作ったのだろう。
（誰だ、あの人、まぁいい…、敵だし、容赦しない…。）
すぐに大剣『吸血鬼（ブルドーザオガー）』を出す。
悠二の体は殺気に包まれていく。

ビュンッ！
風をきるような音がした後、
悠二はすでにゴーレムの目の前に出てきていた。
術者はやり手のようで悠二にすぐ反応し、
ゴーレムの腕でなぎ払おうとする。
大きい腕が迫ってはいるが、悠二は焦りもせずに剣をふるう、
音もなく迫った腕の先が無くなった。

「っち、なんだいこいつは！？」
「なんなんだろうね？」

術者はゴーレムを引かせて、逃げようとしたが、
追撃と言わんばかりに、悠二が放った炎玉により大きくバランスを崩した。
ゴッシャァーーーー！
どうやらゴーレムが倒れる寸前で術者は逃げて行ったようだった。
（なんなんだよ…？）
そして地面に着地したところでルイズが駆け寄ってきて

「学園長が呼んでる。」
「了解。でもなんで。」
「フーケのことだと思う。」
「そりゃそうか。」
（学園長、あったことは…ないよな）

第十三話〜〜フーケ襲来（後書き）

戦闘の盛り上げが足らないか。
ああーこればっかりは何と書いていいやら。。

第十四話〜〜学園長室（前書き）

さぁーちょこっと話がそれたけど、大体原作道理だ。
どうやって結界の弱点知らせようかな。

第十四話〜〜学園長室

コンコンッ
「おお、入っておくれ。」

中にいたのは老人の魔法使い、無邪気そうなそれでいてどこか鋭い目、長い白髪、白いひげを生やした男性。
もう一人は緑色の髪、きりっとした顔立ちの大人の女性。
そのほかに二人、タバサとキュルケだ。

「その二人はゴーレムを目撃した生徒じゃ。」
「あら、ユージ？」
「キュルケ？タバサも？」
「…私たちはあの時校庭にいたわ、あれは、フーケで間違いないと思う。」
タバサが説明…、もとい証言した。
＜あんたいつの間に二人と知り合ったのよ？＞
＜あとでね。＞

「ふぅむ…。ミス・ロングビル、目撃証言などがないか町に行って聞いてきてはくれぬか？」
「わかりました。」
言うと女性は、すぐに出て行った。
「あ〜、とりあえず…、あの大量の砂どうにかしてくれんかの？」
「あっ…。」
（しまった、反射的に切ってしまった…。）

「ユージくん、君には残ってもらいたい。」
「え？」
「ききたいことがあっての。」
「わかりました。」
「他の三人は砂を掃除してくれい、先生方もすでに動かれとるから
すぐ終わるであろう。終わり次第
各自解散。明日の昼ごろまた来てくれんかの。」

すぐ三人は出て行った。
「わしの名前はオールド・オスマン、さて質問じゃが…。
君は何者じゃ？」
タカのように鋭くなった、真剣な表情でオスマンは口を開いた。

第十四話〜〜学園長室（後書き）

うーん、次会話ばっかになるかもw

第十五話〜〜学園室にて（前書き）

学院長と悠二の会話です
周りの描写があまりに少ないのはわざとです

第十五話〜〜学園室にて

「君は…何者じゃ？」
「僕は…、まァいわゆる異世界の住人でしょうか。」
「異世界…とな？」
「そう、僕たちの世界では魔法など存在しません。」
「バカな！？魔法が存在しない？」
「僕たちの世界では『科学』が浸透し魔法などいらない世界になっています。
『科学』は色んな事が出来るようになっています。
国、地名、すべて異なる世界です。」
「信じがたいの…。」
「僕たちの世界では『化け物』がはびこっています、奴らは人を食い、その存在ごと消してしまう。
その『化け物』を倒し、世界を守るのが僕たち『フレイムヘイズ』です。」
「ならその『フレイムヘイズ』だという証拠を見せてくれ。」
「見せる必要はないでしょう…。」
「なぜじゃ？」
「ずっと見てたんでしょう、このぼくを？」
「…。」
オスマンは驚いた、遠見の呪文を察知しそれでいて知らないふりをしていた、この少年に。

「すまなんだ、正直怖かった、君に得体の知れぬ力を感じての…。
生徒を傷つけられたらわしは存在する意味が無くなる。」
「いや、いいですよ。」
「で…、そのフレイムヘイズとやらは何人いるのかの？」

「数えきれないですね。」
「なるほど。やはり証拠が欲しい、魔法使いでもできないことをしてほしい。」
「あの宝物庫、力が渦巻いていますね、あれは多分一点を狙えばすぐ壊れる、
もろいものかと思われます。」
「なぜわかったのじゃ？」
「僕はいわゆる魔力が見えます、前の世界でも力の動きにを見れました。」
「なるほどのう…。では最後に質問じゃ、君はこれからどうする…？」
「向こうには大切な人や恋人がいるんで、できるだけ早く戻ります。」
「だが戻る方法などこの世界にはないぞ？」
「あー、それは僕ならできることなんで心配しないでください。」

「では、また明日の昼、ここに来てくれんかの、すまんが力を貸してくれ。」
「いいですよ、わかりました。」
もう一度悠二は口を開いた。
「ルイズは『虚無』だと考えています。だとすると僕はその使い魔、ヴィンダールブですね。」
オスマンが固まったのを見て、悠二は出て行った。
（十分な答えだよ、学院長さん。）

第十五話〜〜学園室にて（後書き）

あー、悠二頭良すぎ…。
学院長にカマかけて確信とりやがった…。

第十六話〜〜討伐隊（前書き）

ああーーなんか疲れてるなー
少し話の流れが混乱してきた
みなさんはこういう話の流れとかはどうやってまとめますか？

第十六話〜〜討伐隊

学院長と話してから帰るとルイズがくたびれた様子でお風呂に向かっていった。
悠二は清めの炎をつかいシイに存在の力を渡して庭の方へ出た。
空を見るとすでに月が輝いていた…。
（ああ、月が二つあるんだったな…。）
しばらく月を見つめた後、部屋に戻って早めに寝ることにした。

朝、午前五時程度だろうか？いきなり、
ドコッ！
という轟音がした。
悠二があわてて外に出たときにはもう逃げているようだった。

そして時間は過ぎ、昼になった
予想通りさっきのはフーケだったようだ。
学院長室に集められた四人は、学院長とともにミス・ロングビルをまった
ノックが鳴りロングビルが入ってきた。

「フーケはどうやら町の少し外れ、小屋に隠れたとか。」
「ありがとう。では君たちに伝えておきたいことがある。」
「なんですか？」
「盗まれた宝についてじゃ。フーケに盗まれた宝の名前は「星を呼ぶ大杖」、
というものじゃ、詳しくは知らんが価値があるらしいのう。
その杖は王国から預かったもので…、
君たち四人にはフーケを捕まえ、宝を取り戻してきてほしい。」

「「わかりました、杖にかけて！！！」」
「この子たちを向かわせるつもりですか??」
「うむ…。すまんが案内をしてやってくれ。」
「わかりました…。」

馬車で移動ということになった。なぜか悠二が手綱を握った時、
すこぶる馬の調子が良くなった、悠二がそのまま馬を操っていたら
かなり早く着いた。

（フーケの隠れ家ってまさか…、あれ?）

隠れ家・・・?
というか廃屋で、窓はボロボロ、ドアは外れてるし、蜘蛛の巣かか
ってそうなくらい汚かった。

「私はあたりをを調査してきますね。あの小屋の中を調べてくださ
い、
なにかあるかもしれませんので。」
「わかりました。」
「では。」

ミス・ロングビルはどこかへ歩いて行った

「三人はここで待ってて僕が行くから。」
「…危険。」
「あぶないわよ?」

キュルケ、タバサが連続して注意してきた

「んー、入ったとたんゴーレムがあの小屋つぶすかもしれないし…、

待っててくれた方がいいよ」
「ならあんたも危ないじゃない。」
「だいじょーぶ、すぐよけるから。…、いくよ。」
「あっ。」

（さて、中に罠がないのは確認できてる、ということは、絶対ゴーレムがたたきつぶす。
ならゴーレムが作られる前にお宝貰って行こうかな。）
なぜ罠がないと判断できたのか？それは入る前に人を超える視力とその鋭敏な感覚で小屋を、
『視た』からである。

悠二が入って、少しでゴーレムがどこからともなく出てきて
ドカンッ。
小屋が潰れた…。

第十六話〜〜討伐隊（後書き）

「星を呼ぶ大杖」ってなんでしょうか？
答えはタバサ似の女の子が使っている「あれ」です。

※7月15日誤字修正

第十七話〜〜盗賊は神にあらがう。（前書き）

神にあらがったら？

第十七話〜〜盗賊は神にあらがう。

「よし、これで邪魔な奴はつぶ「せた…、とでもおもった??」
「どうやってよけたんだい!?」
「あんな遅い一撃、よけれないわけないだろう?」
「っち。」

状況はこうだ、
まず悠二が小屋に入った後、唯一違和感を感じたところ、
ほこりをかぶった戸棚だ…。上から二段目を見てみたら、それがあった。
『「トライゴン!?」』
あとはいうまでもなく、トライゴンをもってすぐ脱出したのみだ

「なんでこっちにあるのかな?君は何か知ってるかい?フーケさん?」
「知らないよ、ただ売ったら高いと聞いたから獲ったまでさ!。」
「返してもらうよ?元来僕のものだし?」
「なにおいってっ!?」

もう反論しようとた時にはフーケのみぞおちにはこぶしが入っていた。
当然、人を超えた悠二の力をたたきこまれると・・。

ガラガラガラッ!!!

ゴーレムは崩れ、一瞬で事が済んでしまった。フーケはぐったり倒

れた。
当たり前だが手加減はしてある、全力でやると体が見るに堪えないことになってしまうからだ。

（なんでトライゴンがあるんだ…？この世界はどうなっている！？）
（ふむ…。『トライゴン』『神鉄如意』『タルタロス』は元来余が作ったものだ、
大方余に呼び寄せられただけであろう。）
（だといいけど・・・。まぁ、いいや。）

「さてと、起きてもらいましょうか、ミス・ロングビル？」
「よくわかったね？」
「「「えっ！？」」」
（驚くようなことか？普通に考えればわかることじゃないか）

悠二にとっては簡単なことだ、まず最初に襲ってきたときに顔を見ている
一瞬だが…。確信がなかったため、放置していたら
今度はミス・ロングビルがいないときに、フーケが来た、
そしてそのあと都合よく足取りをつかんだロングビル。
小屋を調べてください、自分は周りを見てきますから、なんて言った時はすでに茶番他ならなかった。
だが、それでもあえて載せた悠二は性格悪い…、かもしれない。

「いつわかったんだい？」
「確信をもったのは二回目に見たときだね。」
「私はずっと踊らされてたって？あっははははは」
「おとなしくしててね。」

トンッ…バタッ

悠二はフーケの首筋を軽くたたいて気絶させた。

「さぁ、かえるよ？」

ポカーンとしているみんなに言ったら、

「あ、え、うん。」

曖昧な返事が返ってきた。

第十七話〜〜盗賊は神にあらがう。（後書き）

勝てるわけないだろう…。瞬殺だよコリャ。。

そうですね答えは『トライゴン』ですね。

かんたんだよねーw

第十八話〜〜舞踏会（前書き）

ズンチャッチャ〜ズンチャッチャ〜〜〜♪♪

第十八話〜〜舞踏会

一瞬で決着がついた。
当たり前だが三人とも唖然とする中、帰り支度を早々と終えた悠二は
「おーい、三人とも馬車に乗りなよー。」
気楽に催促をかけるだけであった。

しばらくすると学院についた、気絶したフーケを学院長室に引っ張って行った。
オスマンはさして驚いた様子もなく
「みな御苦労じゃった、三人には国から報酬が出るよう手配しておこう。」
「ユージはどうなるんですか？」
「このものは貴族でないからの…、報酬はなしじゃ。」
「そんな…。」
「良いよ、別に報酬目当てでやったわけじゃないし。」
（この爺さん…、読んでたな？）
「ならいいけど…。」
「今日は三人の功績をたたえ舞踏会を開くつもりじゃ、存分に楽しむよう、では解散。」
「「「失礼しました」」」
「あ・・、学院長少し話があるので残っていいですか？」
「よかろう。」

三人が出て行ったあと、悠二が切りだした。

「この杖は一体どこから来たものなのですか??」
「わからんが、彼方より来たものらしいのう。」
(質問を変えよう…。)
「なら、これの使用方法は分かりますか?」
「君は知っているのかね?」
「ええ、これは『僕ら』のものですから。」
「なるほど…、別の世界から来たものか、君はこれを使えるのかね?」
「いえ、僕には使えません。」
「ふぅむ、とりあえず学院で預かっといてよいかの?」
「ええ、来るべき時節に返してもらいますよ。」
「では、君も舞踏会に参加するがよかろう、たのしんできたまえ。」
「わかりました、失礼します。」

時間は夜。そろそろ舞踏会だが…、あたりまえだけど例服とかそういう部類のは一つもない。
私服というのもなんだから一人ベランダでたそがれることにする。
そんなときシエスタが寄ってきて、お酒を進めてきた。

「飲みませんか?」
「うん、ありがとう。」

今日の盗賊退治の話とか少し黙りながら酒を飲むとか、
実に普通で穏やかな時間が流れていく。
そして…、

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢のおなりー!!」
パンパカパーーーン!!!
(うるさぁ!?)

ずれた突っ込み…。

こっちにルイズが寄ってきた。
白いドレス…、ぐらいの表現しか悠二は知らない。
とりあえず似合っていた。

「音楽始まったみたいだけど踊らないの??」
「…。」
「なに…?」
「一緒に踊りませんこと、ジェントルマン?」
軽くスカートもって腰を下げた。
「ダンスなんてできないよ?」
「私に合わせてくれればいいわよ。」
「なら、いこうか。」

音楽に合わせてステップを踏んで、
くるくる回りながら、ルイズが口を開いた
「報酬がなくても何も思わないの?」
「言った通り、報酬目当てじゃないよ。」
「じゃあなんで?」
「使い魔だからね。…、ご主人様のために戦うのは当たり前…、でしょ?」
「そうね…。」

少し顔を俯けたルイズが気になったが、なんでなのかは聞かない。
ただ今の空間を楽しむ、それでいいはずだ。
あともう少し、あともう少しであれが来るのだから。

第十八話〜〜舞踏会（後書き）

もう少しでなにがくるんだろーね？

とりあえず次回は品評会です。

あー、なにも考えてないなぁ。。

第十九話〜〜品評会「前編」（前書き）

前後編に分ける必要あるかなぁ？？w

第十九話〜〜品評会「前編」

昼休みや夕方、少し学園内を見回ってみると使い魔に芸を教え込んでいる生徒が何人かいた。
カエルやフクロウ、ネズミ、ドラゴンってあれはタバサか、ドラゴンはシルフィードだっけ？
どうもかまってほしそうに見えるのは僕だけか？？
（芸ね、あー何すればいいんだろうか？火の玉でも作ってみるか？
駄目か、平民は魔法を使えない
自由に空を飛んでみる、これも没。あ…、いいこと思いついたぞ。）
とか考えていたら

「明日は姫様も来るらしい。」

なにやらうわさが聞こえてきた、どうでもいいけど。

そして日をまたいで、朝になった。
どうも朝御飯の時から周りがさわがしい。
（あー、姫様が来るとか言ってたけか？）
「ねぇ、ギーシュは姫様と会いたいの？」
「そりゃ勿論さ！あんな美人、そうそういないよ！」
「わかったから叫ばないでよ！？」

＜全校生徒は姫様御一行を迎えるため、正門…、＞
「ついてきたまえ。」
「わかったから引っ張るな！」

正門前にはもうがやがや生徒が集まっていた。
（そこまで人気があるのなら王になっても大丈夫か。）
ルイズもその一行？の塊の中にいたのでそこのよっていくことにした。
「姫様って人気あるんだね。」
「もちろんよ！」
（うん、いい人らしいな。）

うおーーーー！！！！！

どうやら姫様たちが来たらしい。
見たこともない生き物に乗った騎士…、グリフォン隊というらしい。
がドンドン下に降下していく。
（へぇ…、顔は鷲、胴はライオン、しかも飛べる、結構かっこいい生き物だな。）
後ろのほうから…、あれはユニコーン？にひかれた馬車が見えてきた。

うおーーーー！！！！！！！

さっきより騒ぎが大きくなったことからあれに乗っているのは、姫様か。
自分たちの近くに寄ってきたとき、周りがうるさかったが少し納得もした。
（ああ、なるほど、きれいな人だな。）
きれいな顔、透き通った目、発育の良い胸とかが見えた。

ふと、ルイズを見ていると顔を赤くして姫様の後ろにつく騎士を見ていた。
その人は帽子をかぶっていて顔が少し見えなかったが、男の人のよ

うだった。

なんだろうかと気にする暇もないまますぐ移動となり、そのまま品評会の準備に入った。

（さぁ、どういうものになることやら。）

第十九話〜〜品評会「前編」（後書き）

何ができるかはお楽しみ☆

第二十話〜〜品評会「後編」（前書き）

この品評会出何やるか考えるのに結構時間を食いました。
楽しんでくれたら幸いです＾＾

第二十話〜〜品評会「後編」

瞬く間に使い魔の芸が終わっていく。
自分たちの発表が近づく中
「あんた本当に大丈夫。」
「そう思うなら黙って祈ってね。」

「さぁ行くわよ。」
「りょーかい。」

少し周りが静かになったところで僕らは出て行った。
横でルイズが紹介してくれたのを受け取って前に出た。

「僕はルイズに使い魔で、名前は悠二といいます。」

くすくす笑い声が聞こえる、平民だとか思っているのだろう

「今日は一つかくし芸でもしたいと思いますが、
それをするにあたって少し姫殿下に質問したいと思います。」
「何でしょう？」
「好きな色は何ですか？」
「水色でしょうか。」
「わかりました。…、では皆様にお願い申し上げます、あなた方皆さんが思う一番きれいな水色を思い浮かべて下さい。」

シー・・ンッとみんなが沈黙した、どうやら素直にやってくれているようだ、ありがたい。

「そのイメージを水晶の形に変えてください、そしてそれがこの場に出てくるようにと
ゆっくりとで構いません、祈って下さい。」

（さぁ…、始めようか）
（やるのか、あれを）
（うん、『創造』を開始するよ、みんなの祈り、思いが形になるように。）

みんなが集中のため目を閉じている、そのすきに悠二は指を空中に向けた。
指を中心にして複雑な自在式『創造』が出来上がる…。

『創造』は近くにいる者の願いを吸い取り形にすることができる。

水色の光が発生し急速に一点に向けて形を作り始めた。

その光にきづいたように何人かが顔を上げ周りの人たちをこっちに向かせた

光はすでに渦巻いてどんどん丸く、きれいな水晶を創り始めた。

そのありえない光景にみんなが目を奪われた。

そしてついに出来上がった水晶はとてもきれいで日光に反射し水色の光を放っていた。

出来上がった後、爆発的に拍手が巻き起こった。

その水晶は『星』（アステル）となづけられ、王室に献上させられたらしい。

第二十話～～品評会「後編」（後書き）

もちろん品評会は優勝となりましたw

さっ次は～～～

なんだっけw

第二十話ＥＸ～～とある『燐子』の一日（前書き）

少し外伝を…。

第二十話ＥＸ～～とある『燐子』の一日

朝…、私の一日は御主人さまの主人…、つまりルイズさんを起こすところから始まる。
ルイズさんは朝が弱いのか、あと五分、あと五分ときりのないことを言う。
御主人（悠二）さまからの命令だからここで引くわけにはいかない。

「あなたはこれで起きる…、３…、２…、１…。」

指を擦り合わせる感じで…、
パッチン！！

「ひゃあ…！？」
「ふふっ、おはようございます。」
「いつもだけど、それどうなってるのよ？」
「な・い・しょですよ。」

悠二によると一種の催眠術的なものらしい。

「着替えさせますからたってください。」
「は～い…。」

テキパキと制服を着せていく。

「髪を梳きますよー、椅子座ってくださいな。」
「…。」

（髪質は柔らかいなぁ、ルイズさん。）
そんな事を思っているとザッっと窓際で音がした。
「おはようルイズ、シイも。」
「おはよう、ユージ。」
「おかえりなさいませ！！」
「じゃあ顔洗ってくるから、ルイズまたね。」
「わかったわ。」

ご主人様はそういうと窓から飛び降りて行った。
「ルイズさんも終わりましたよ。」
「ありがとう。」
（このごろお礼言ってくれるようになったな。）

ルイズは最初の頃シイという存在を理解できてなく少し怖がっていた。
当り前だろういきなり炎の中から出てきた…、なんて理解できるはずがない。
この頃はなれたのか少しは話してくれるようになった。

「ルイズさん、いってらしゃいませ。」
言ってぺこりと頭を下げる。
「いってきます。」

ここからは学院内で働いている。
もちろんメイドとしてだ。

朝の洗濯をしたり…。

昼のご飯の給仕を手伝ったり…。

夕方近くに大浴場を洗ったり…。

一日の締めくくりとしてルイズの部屋の掃除など。

大変だけど楽しく、そして忙しく。

働けるように手配したのは悠二だが。

そして夜に悠二がシイの手を握って一気に存在の力を流し込み、

「今日もありがとう、明日もたのむよ。」

「はい！」

こうしてとある『燐子』の一日は終わって行くのだ。

（明日もがんばるぞーーー！！！）

第二十話ＥＸ～～とある『燐子』の一日（後書き）

あー何か質問などはありませんか？
感想などに疑問に思ったことを書き込んでください。
できるだけこたえるよ☆

第二十一話〜〜姫様の頼み（前書き）

遅れてごめんなさい。
まぁ見てやってください。。

第二十一話〜〜姫様の頼み

品評会で一位をとってルイズは若干浮ついてるようだった。
『創造』は結構疲れるのだがまぁつかって損は無かっただろう。

そんなこんなで夜、就寝の直前、ルイズと会話していた時
誰かが外、ドアの外にいる気配がした
とっさに大剣を出した。

「え、どうしたのよ？」
「シッ！誰か外にいる…。」

一気にバン！！！ッとドアを開けた、外にいたのは…。
姫様でした…。

「えええええええええ！！！！！？？？？…、ッとすいません驚いちゃって…。」
「い、いえいえ。」
「ルイズこっち来て。」
「なにが起こったのよ！？って姫様！？」
「久しぶりね、ルイズ・フランソワーズ。」
「お久しぶりでございます。」

すぐにルイズがひざおったのを見て悠二もまねた。
（姫様ってルイズの知り合いなのか？久しぶり…、知り合いとみていいか。）

「……。」

「……。」

考えを巡らせた悠二はあまり話を聞いてなかったがぼんやりと二人が幼馴染の様なものだとわかった。

（で、お久しぶりって挨拶だけじゃないなこれは。）

「でね、ルイズあなたに頼みたいことがあるの。」

（それきた…。）

「何なりとお受けいたしますわ。」

（あーこれ僕も巻き込まれるなー危険なことはやめてもらいたいんですが。）

くだらない考えをしている間に話は進む進む。

要約するとこうだ

トリステインのために自分はゲルマニアの皇太子と婚約する、

しかしアルビオン皇太子ウェールズにあてた手紙、まぁラブレターだそれが見つかると婚約は破談結果的にトリステインが危機に陥るため回収していてほしい。

アルビオンまでの道のり、案内と護衛は優秀なものをつけるまぁこんなところ。

（政略結婚のために本命の人から恋文を回収して来いね…。）

アンリエッタが帰った後ルイズが小声でこう言った

「魔法も使えないわたしがこんな重大な役割を受けってしまって…。」

「いまさら弱音？」

「…。」

「どんな頼みでも聞くって友達に言ったのだからちゃんとやりとおすことだね。

まぁ手伝うぐらいはできるし。」

「ありがとう。」
（けどねー、変だよね明らかに未熟な魔法使いにこんなこと頼むか？こういうのは腹心の手誰に任せるのが定石だろう。）
（ふむ、トリステイン王家はなかなかの荒れようだと聞いた、もしかしたら信頼できる部下がいないのかもしれん、この甘え、高くつかねばよいが）
（まったくね。）
「どちらにせよ出発はあす以降、ゆっくりお休み。」
「うん。」
（女の子に無理をさせるな、姫様。）

第二十一話〜〜姫様の頼み（後書き）

もうアルビオンねー
ワルドどうしよう？殺そうか？

第二十二話〜〜白の国へ（前書き）

うん、かなりはしょったねw

第二十二話〜〜白の国へ

夜があけ朝が来た、
今日、アルビオン別名『白の国』に出発となる。
案内と護衛の者は早朝の校門に来るということだったので、
さっさと用意してそこに移動することにした。
（まともに機能してない国来る奴を警戒するに越したことは無いな…。
しっかりしろよ全く…。）

校門に出てしばらく経つと何かが羽ばたく音がした、それだけならあまり気を使わないが
その羽ばたく音は近づいてくる。
上を見たときにいたのはライオンの体に鷲の頭、グリフォンだった。
うえに誰かのってるけどグリフォンの影で見えない。
（あの人かな？）
ドンドン下に降りてくるグリフォンはどこかで見たことがある人を乗せていた。
「はじめまして、姫様より案内・護衛を任されたワルドだ。」
（あー品評会にいたのこの人か？）
「グリフォン隊隊長、風のスクウェアだ。よろしく。」
「どうも。」

ふと自分の後ろの方を見たかと思うと顔色が変わりそちらに向けて走り出した。
何かと思って後ろを見ると。

「ルイズ！ルイズ！僕の可愛いルイズ！」
「ワルド様！？」
（ロリコンって、いやないか？ここの文化レベルだと許嫁かね？）
「ああ、とりみだしてすまない、ルイズと僕は許嫁なのだよ。」
（予想道理、ルイズ、顔赤いよ大丈夫？）
「じゃあ、あまりあてないでくださいね？お邪魔はいたしませんから。」
「はははは、気をつけるとしよう。」
（目が笑ってないよー隊長さん？）
「では行こうか？」
「はい。」

思った通りだがいちゃいちゃし始めた。
どうでもいいうえにここの世界に口出す権利は無いが…。
年の差考えろ、そう思った。

（あーシャナなにしてるのかなー、そろそろ言われない被害者が出るかも…。）

なんだかんだで夕方までかかってやっと目的地に着いた。
ラ・ロシェール一つの石から切り出された町らしい。
「ここで一日宿をとる、明日の夜出発だ。
荷物を整理したら夕食に使用か。」
「了解。」
「ルイズ背中は――――――。」

またいちゃつき始めたので少し荷物整理
ワルドが宿を取りに行ったのでルイズに言っておいた
「気をつけて。」と
ルイズは意味わからないという顔をしていたが放置しておいた。

説明する時間もタイミングもない、ワルドがくっついている。

夕食の途中唐突にワルドがこんなことを言ってきた

「手合わせしないか？」と

（体なまってるしちょうどいいや。）

「いいですよ、ただし周りに迷惑がかからないよう外ですよ？」

「あたりまえじゃないか。」

ルイズの文句は無視しておいた、それなりに強いのは分かるけどね。

第二十二話〜〜白の国へ（後書き）

いちゃついてるところ見せてもしょうがないし。

問題はヒゲオヤジだねー

殺す？

第二十三話〜〜手合わせ（前書き）

お気に入り登録件数が徐々に増えていく…。
うれしいけど、これっておもしろいの？

第二十三話〜〜手合わせ

手合わせが始まって数秒、それだけで分かる。
ワルドは確かに強い。騎士隊の隊長名だけはある、…が
（シャナほど強くない、カルメルさんほど技能があるわけでもない。
この程度ならわざわざ『吸血鬼』の能力も必要ない。）

結果的に敵になりはしない。
つばぜり合いは起きない、相手はレイピアのような杖で突いてきて
いるので
こちらとしてもはじくしかない。
しかもスタミナは相手もある、悠二はほぼ底なし。
悠二が手加減している分勝負は千日手の様なものになっている。

（だけど、決めきれない。これじゃあ終わらない…、どうする？）
（なんだこの平民は？なぜここまで付いてこれる？なぜ常人離れし
た雰囲気を放っている？）
（よし決めた…、ここだ！）

ガッガガッ…ドカン！！！

悠二はレイピアでの突き、魔法の波状攻撃のパターンを読み切って
足でワルドの胸部を蹴り飛ばした。
体勢を崩したワルドはすぐに持ち直そうとするが、なにかに気づい
たようにこう言った。

「私の負けか。」

「そうですね。」

悠二は蹴り飛ばしたあとに高速でワルドの後ろに移動、剣先をワルドにつきつけていた。

「いや、いい勝負だった。とてもやりがいがあったよ。」
「それはどうも、でもあんまり戦いたくないですね。あなたとは。」
「そうか。でも、君はまだ…何か隠した力があるんでないかい？」
「さぁ？」
（さすがにばれたか…。）

どちらも剣を収めながら宿に帰っていく。
その後ろから二人の動きについていけなかった桃髪の少女は焦って付いていくだけだった。

第二十三話〜〜手合わせ（後書き）

あれ…、いまさらだけど悠二に勝てるキャラいなくねw

第二十四話〜〜視線（前書き）

あー何か雑なような…。

第二十四話〜〜視線

手合わせが終わり、そのまま日をまたいでそのあと話されたが、
どうやら今日の夜じゃないとアルビオンには行けないようだ。
理由は聞いてないが。
（じゃあほぼ一日暇ってことか？やることないってやだなー。）
暇を持て余して昼寝してたら夕方になった。
夜も近づいてきたってことで出発となったわけだが。
ばればれなぐらい視線を感じる、数は多数。どうやら僕に向いてみたい。
気配はそれなりに隠れてることから見て盗賊か何かだろう。
（変なのに目をつけられたなー。）

「ルイズ。」
「なによ？」
「これ持って先行ってくれる？」
「なんでよ？」
「ちょっと用事。すぐ追いつくから。」
「…、まぁいいわ。わかった。」
「ありがとう、一応それはワルドさんに見られないようにね。」
「よくわからないけど。追いつくのよね？」
「うん、絶対ね。」
「そ。なら先に行くよう伝えておくわ。」

（さって、どっか広いところはー・・・）
とりあえず広い所に着いた、荒野みたいなところで障害物がない。
やっぱり誰かついてきていたようだ。

「さ、出ておいで？相手をしてあげる。」
ザザザザザっと人が出てきた、数は…7，8，9，10人。
「済まねえが金のためだ、御命頂戴！」

ドカッバキッ、ドスッ！

山賊程度相手になるわけもなく一瞬で地に伏された。

「もう一人、だれ？どうやらこいつらよりましみたいだけど？。」

第二十四話〜〜視線（後書き）

わーもう少しでお気に入り１００じゃんｗ
すごくうれしいです。
応援よろしくねー。

第二十五話〜〜歪み（前書き）

行ある割には文字少ないＯＴＬ

第二十五話〜〜歪み

信じられなかった、いや信じたくなかった。
ここにあれがいるわけがない、だが目の前の『それ』は…、

『紅世の徒』
そう呼ばれる化け物、人を食らいその存在ごと消滅させる。『化け物』だ
この世の“歩いて行けない隣”にある世界“紅世”の住人達。
少なくともこの世界には存在するものではないと思っていた。
だが現実は…、

「冗談だろ…！？」

そこにいた『それ』には見おぼえがあった。
否、『それ』のは放つ雰囲気に。

マネキン…、いや人形？
何とも言えない『それ』は人の形はしてあるがただそれだけの
目も口も鼻の出た部分も耳も、何にもないただの人形
そいつの目的も分からない。
だが『それ』は明らかに…。
『紅世の徒』の隣子だった。

それから何も言わず
それを悠二は何も考えずただ…

横薙ぎ一線『吸血鬼』を振って吹き飛ばした。

残った炎の色は「薄い白」だった。

第二十五話〜〜歪み（後書き）

さぁ、世界がゆがみ始めます。

いや、ここからが『ゼロと創造の使い魔』の始まりなのかも…。

第二十六話〜〜空飛ぶ船で（前書き）

やっとここまで来たよ…。
ここからだよ、いやいろいろと。。

第二十六話〜〜空飛ぶ船で

『あれ』を見た後どうやって移動したのかは悠二は覚えていない。
ただルイズに持たせてをいた発信器代わりのしおりに宿る存在の力をたどってここに来た。
余ほど難しい顔をしてたのだろう。
追いついた後もルイズは何も言ってこなかった。

そして悠二は思考の海から逃れた後に自分が浮いた船の上にいることにいきづいた。
「ルイズー？」
「な、なによ？」
「なんでこの船浮いてるの？？」
「ええ？もう飛んで十分は経つわよ？いまさらなんで？」
「ごめんね、違うこと考えてた。」
「…。この船には風石っていう風の力が固まった石があるのよ。」
「あ、なるほどね。それを利用して飛んでるのか…。じゃアルビオンは？」
「そう、浮いてる。」
「違う違う。アルビオンってもともとどこから浮かんでいったの？」
「ハルケギニアのどこかだと聞いているわ…。」
「ふぅん」
（『大陸』を丸ごと浮かすぐらいできる？なら、トリステインもだいぶ危険なんじゃあ？
黙っておいた方がいいかな…。）
「空族だ！！！」

「え！？」
「なに空族って？」
「空中盗賊かな？言ってみたら。」
「あ、なるほーど。」
「ってなんでそんな呑気なの！？」
「いや抵抗の使用がないし…。」
「なんでよ！？」
「ルイズ、僕らだけならまだしもこの船に何人人が乗ってると思うんだい？
彼のこの判断は正しいよ？それに逃げるだけなら捕まった後でもできる。」
「あ、そっか。」

悠二たちは空族が乗り込んできたときに潔く降伏した。

第二十六話〜〜空飛ぶ船で（後書き）

さぁ皆さんおわかりでしょうが空族の正体は誰でしょうかw？

第二十七話〜〜司教と狩人（前書き）

間を開け過ぎてしまったか。
すいません。。

第二十七話〜〜司教と狩人

悠二たちの船が空族に襲われていたころ、あるところでは二人の男が話していた。
一人は自然体、もう一人は明らかに話している男を警戒している。
「で、僕は何をすればいいのかな？」
「ここに向かってる船を沈めろ、乗員は皆殺しだ。」
「わかったけど、なんでそんなことを？」
「貴様が報告した内容が危険なものだったからだ。」
「ふぅん？」

自然体で話している男、『狩人』フリアグネは自分の作った燐子を飛ばし情報を集めていた。
隠蔽の自在法などが組まれており、悠二でさえも直接見るまで分からなかった、かなり高度な燐子だ。
普通の人間なら見ることも叶わないだろう。
フリアグネは言ってないがそれは暗に見破れる奴がいて、しかも倒せるほどの実力をもった奴がいるということだ。

「…報酬は？」
「報酬だと？」
「何を言ってるのかな？あたりまえじゃないか？情報をよこし、そして君のために動いてやろうとしているんだよ。」
「む。」
「じゃあその指輪をくれないかな？」
「な、これは！？」
「面白そうな力をもってるよねぇ？ああ、言わなくていいよ自分で使って効果がわかるからこそ面白いんだ。」

「面白半分でこれを渡せだと？」
「あはは、別に今ここで殺して奪ってあげてもいいんだけど？」
もう一人の男クロムウェルから見ると、フリアグネはとても恐ろしくに見えている。力も不明、何がしたいのかも不明、存在すらも不明。不明なのだ、全てが。
「どうするの？」
「ぐぅ、成功したらくれてやろう…。」
「わかった。」
そう言ってフリアグネ忽然と姿を消した。
消えた後の安心から腰の抜けたクロムウェルを誰が責めれるのか。

第二十七話〜〜司教と狩人（後書き）

紅徒の王と嘘んこ司教、どうあがいてもこうなるでしょう？
威圧感が違いすぎる。

第二十八話〜〜プリンス・ウェールズとルイズたち（前書き）

ここまでは何とかなんだけどなぁ？
あっさりしすぎか？

第二十八話〜〜プリンス・ウェールズとルイズたち

「あはははは！！！！」
「申し訳ありませんでした…。」
「きみたちつよいねぇ、あはは。」

現状はウェールズの前にルイズたちが思いっきり頭を下げている状態である。

なぜこんな状態になったのかというと、
空族に黙って捕まった後、隙を見て脱出。
空族をなぎ倒していったはいいが（もちろん手加減している）、必然的に守られていたウェールズは一人となり最後にやられそうになったときに顔を隠すための兜が落ち（正確には脅しとして切られた）出てきた顔がまさかのウェールズ。
そこから最初の部分へとつながっていく。

「いやもう顔上げて構わないよ？」
「ハァ…。」
「いやーなんでこんなところにいるんだって顔をしているね？
物資が足りなくなってしまってね？仕方なく空族なんてやることになったんだけど、あ、もちろんちゃんとラ・ロシェールまで無傷で返すつもりだったんだけどね？それで首尾よくいったかなって思ったら
見事にひっくり返されちゃって…。」
「…。」
「いや、君達が悪いんじゃないよ？こういうことした僕たちが悪いのだし。」

普通なら即刻処刑確定である。
不謹慎ながらルイズは戦争をやってくれていて助かったとおもったのだった。

「で、君たちは何をするために来たのかな？トリステインからのようだけど。」
「あの手紙を。」
「ああ、そういうことか。それは今は手元にないね。隠れ家にあるから案内するよ。」
「ありがとうございます。」
「この三人を部屋へ通せ。」
「は！」

部屋に通されてしばらく経ってからルイズたちがやっとはけた言葉は、
「「助かった。」」
「危なかった。」
情けないことこの上ない言葉であった。

・―・―・―・―・―

それは飛んで船を目指す。
それは気配を消しながら飛ぶ
それはトランプを携えて先を望む。
それが船をとらえるまであと少し。

第二十八話〜〜プリンス・ウェールズとルイズたち（後書き）

そろそろ戦闘ですよー。
うまく書けるかとっても不安。
感想どしどし書き込んでください！

第二十九話〜〜再会そして…。（前書き）

※前書きは特にありません
…、じゃあなぜ書く…。

第二十九話〜〜再会そして…。

「ッ！？！？」
「え、どうしたの？？」
「…。二人はここにいて。」
「え？」

悠二は荒々しく部屋を出ていった。
ルイズが後を追おうとしたが
「ルイズ、やめていた方がいい。彼の様子がただ事ではないことを示している。」
「なんであいつは何もいようとしないの！？そんなに頼りにならないの？私は…。」
「…。」
声を荒げたルイズにワルドは何も言ってやれなかった。

―・―・―・―・―

「ウェールズ様急いで隠れ家に向かうように行ってください。敵が迫っています。
僕はそれの足止めに向かいます。」
「え、ちょっと！？」

同じくすぐに悠二は出て行った。
「…。よくわからないが急いだ方がいいね？鬼気迫るほどのことが起きたようだ…。」
ウェールズは支局冷静に動くように努め、部屋を出て行った。

―・―・―・―・―

甲板に出た悠二はすぐに飛行の自在法を展開、空に飛び出し『その』気配のする方に向かう。
『その』気配は近くにいる、そう感じる。
この世界にいると思わなかった、否、思いたかった『その』気配はすぐそこに…。

しばらく飛んでいると『それ』がいた。
（『狩人』フリアグネ…。なんで生きているんだ。）
燐子の最後の灯火の色でわかってはいたが、やはり不明だ。
あの時は確かにアラストールに吹き飛ばされ生きていられる状況ではなかった。

「はじめまして、かな？君は誰だい？」
（何を言っている？この至近距離でなぜ気づかない？）
「フリアグネ…。」
「あれ、僕を知ってるの？君は何者？」
「お前に食われた存在だ。いや、それはどうでもいいんだ。」
「食った？食べるってどういうことだい？」
心底フリアグネは分からないといった表情をしている。

（なにを言っている…？というかこいつがここにいてあの燐子はどうしたんだ？）
「マリアンヌはどうした？」
「…、誰だいそれは？さっきから分からないことを言ってるけど？人違いではないかい？」
（憶えてない…？なんで？）
「とりあえずそこを通してもらえるかい？仕事があるんだ。」
「何の仕事だ？」

「この先を進む船を落とす。あ、そうかどこかで見たような気がしていると思ったら…。」
「わかっているんだろう？」
「僕の燐子をやったのは君か。ということは強いんだろーな。で通してくれる？」
「そんなわけないだろう。」

そう言いながら悠二は自分の右肩から何かを引っ張り出すようにして腕を下に振り下ろす。
同時に黒い炎が悠二の体を包み形が変わっていく
後ろに伸びた炎は後頭から伸びる竜尾に、
体を包んだ炎は緋色の凱甲と衣に変わりその左腕にはすでに『吸血鬼』が握られている。
その姿を見ても特にフリアグネは反応を見せず、
「へぇ。」
っとこれだけしか言わなかった。

「まぁとりあえず邪魔をするなら押しのけるよ？」
「やってみろ。」

激しい戦闘が始まる。
場所は空中、邪魔者はなし。
爆発と轟音をとどろかせながら…。

第二十九話〜〜再会そして…。（後書き）

さぁーーー次は戦闘描写ですよーーー。
細かく書きたい気持ちもあるから長くなるだろうな…。

第三十話〜〜この空域、戦闘につき（前書き）

戦闘描写、久しぶり…。つ、疲れたｏｒｚ

第三十話〜〜この空域、戦闘につき

（強いなやっぱり、知ってる宝具を使っているだけましか…。とは言っても、どういうことだ？
なんでレギュラーシャープしか使ってこない？
今のところ見えるのはこれとあいつの周りの長衣。ッ！？）

異常なぐらいのカードが襲ってくる、存在の力で強化されているようで切れ味もよさそうだ。
右から、下、左右挟み込み、前から後ろから。どんどん追い詰められてしまい回避ができなくなり、
『吸血鬼』と竜尾で迎え撃つしかなくなってきた。
左、上、左右…。迫りくるカードの嵐をなんとか耐える、そして近づいたカードを切った瞬間、
『吸血鬼』に金色の鎖が巻きついた。

（バブルルート！？しまった！？）

剣が使えなくなってしまった、そしてそれに動揺しているときに。
チリン、チリン
ドドドドン！！！！！

「ダンスパーティー…。」
「あれ生きてるの？死んだと思ったんだけど？」

まさかカードが爆発するとは思っていなかった。効果を知らなかったらいまので地面にたたき落とされていただろう。高度が高い分、

落ちたら真っ赤なトマト確定だ。
（剣が使えない…。カードが邪魔で近づけないってのに…。ッツ！？）
ドドドドン！！！！！
とっさに上に飛んでよける、それを呼んでいたかのようにカードに包みこまれた。
「ッグ！？」
リリン…。
ドドドドン！！！！！
爆煙の後に残ったのは、
「ハァハァ…。」
さっきのはとっさに自分を竜尾で包み防御した…が、防御が間に合わなかったのか多少はダメージを受けてしまった。
「しぶといね…。」
「頑丈だからね。」
（まずいな、いつまでも持たないぞ…。あんまり使いたくないけど…。これしかないな。）
「『暴君』！」
「お？」
銀の鎧が自分の体からはい出してくる、これは力を結構消費する、しかも大したことない理由だが。
…、体からはい出てくるのは心底気持ち悪い。
その分かなり高性能だ。

（暴君二体は敵本体を叩け一体は僕の防御を！）
そして『暴君』は動き出す。
命令道理、二体はフリアグネを襲い始めた。
フリアグネを取り囲み襲いかかる。
「お？あはははは、これはおもしろいや！」

そういいながら明らかに余裕な表情で『暴君』からの攻撃をよける。
恐ろしい奴と心底悠二は思った。
そもそも『暴君』は最初に決めた命令、もとい強い願いを吸い取って動く。
要するにほぼ「自動（オート）」だ。
だがカード型の宝具レギュラーシャープは使用者の意思道理に動く。
要は「遠隔操作（リモート）」である。
遠隔操作しながら先読みし、なおかつ爆発のタイミングも怠らない。
そして攻撃の回避もする。
そんなことができるのはなかなかいないだろう。

「終わらないね…。もう船ともかなり突き放された…。今回は帰るとするよ。えっと、名前は？」
「坂井、坂井悠二。」
「じゃあね、坂井悠二君。また会おう。」

そう言ってフリアグネはどこかへ飛んで行った。
どこまでも楽しげな表情で。

第三十話～～この空域、戦闘につき（後書き）

うまく書けてたかなぁ？
フリアグネは強いんですよー。。
※感想どしどし書き込んでください！

第三十一話〜〜思考（前書き）

短い。

第三十一話〜〜思考

悠二はフリアグネが去って行ったあと、ルイズが持つ発信器代わりの栞の気配を手繰って空を飛んでいる。その心中は穏やかではない。

「どういうことなんだ…。」

『わからん。あの盗人は討滅されたのであろう?』

「うん…。」

『そもそもこの世界自体が我等から見てありえないものだ。』

「だよね。…でも、記憶をなくすっていうのはどうなんだろう?」

『そもそも「存在の力食べる」行為は絶対に忘れてはいかんだろう、存在の力がなければ消滅してしまう。
だが奴の口ぶりから見て、この世界に来てから食事をしてないのがわかるが…。』

(どういうことなのかな…。食べるのを忘れる…。
いや、必要がない??だから忘れた?なら代わりになっているのは…。)

「『魔力』」

「ははは、どうやら同じことを考えていたようだね。」

『らしいな。可能性だが、それで食べる行為が必要ではなくなった

のだろう。』

「だとすると…。」

『ああ。』

「あまり考えたくないけど、放っておいたら力が強まるばかりなんじゃない？」

『可能性は高い。』

「なら早く討滅するしかない…、か。でも記憶を失ってるというのは。」

『ああ、さっき言ってた「マリアンヌ」か？』

「そうそう。気持ち悪いぐらい溺愛してたから、忘れるのは無いと思うんだけど。」

『それはさすがにわからぬな…。』

こんなことを話しているうちにアルビオンにつきウェールズの隠れる基地に着いた。

第三十一話〜〜思考（後書き）

代わりにはなるかな？
ちなみに設定上空気中に魔力は散乱しています。
それを体の中にためれるのがメイジ。
平民は無意識のうちに発散させているため魔法が使えない。
そんな感じです。

それとオリジナルの宝具を出そうと思うのですが、名前を考えてくれませんか？
効果と形は自分で決めますので。

第三十二話〜〜忘れてた…。（前書き）

※前書きは特にありません

だからなぜ書く。

第三十二話〜〜忘れてた…。

（…。こいつは…。）
（貴様は馬鹿か？）
（気づいてたのなら言ってよ…。）

「貴様何者だ！？」
「あはははは…。」

状況を確認してみよう。
さっきまで空中でフリアグネと戦っていた。
でその時変身して戦い、解除を忘れた。
変身した姿は他人からどう見えるか。
まさに『化け物』である。
そのまま隠れ家に着地したため、衛兵に警戒されていると、そういう状態である。

（わー、どうしよう。）
（…。）

呆れた『祭礼の蛇』は無反応である。

「おい！？」
「あー、すいませんがウェールズ様呼んでくれます？それで全部わかるんで。
あ、あとトリステインから来た客人も。」
「会わせられるわけがないだろう。」

「ですよねー。」

そんなこんなと十分ぐらいやっていると頼みの綱から来てくれた。

「君は誰だい！？」

「あ、ウェールズ様。僕です坂井悠二です。」

「いやどこがよ！？」

ルイズ、君はいつからそこにいたんだい？

「ほら…。」

そう言って悠二は元の姿に戻った。

「驚いたな、君はメイジだったのかい？」

ワルド、あなたもいつそこに来たんです？

「いや、厳密には違うんですが…。もういいですよ、そういうことで。」

「「「投げやりすぎ（だよ×２）（よ）！！！」」」

そのあと説明に四苦八苦した悠二であった。

第三十二話〜〜忘れてた…。（後書き）

宝具のことですが、

ハンドガン型の奴が一つ、名前が欲しいです。
効果はだいたい決まってます。

シンゴさまの『エンゲージリング』はまた次の機会に持ち越させていただきます。
申し訳ございません。

第三十三話〜〜嘘んこ司教と狩人（前書き）

み、みじけぇ…。

第三十三話〜〜嘘んこ司教と狩人

どこかの部屋で男が二人話していた。
前と同じく一人はおびえて、もう一人は自然体。

「失敗した！？」
「あははは、相手が思ったより手強くてね。」
「笑いごとか！？」

自然体の男、『狩人』フリアグネは話しながらも考えている。

（どうやっても思い出せないなぁ？坂井悠二…？食べた？何を？？存在を食べる？？疑問ばっかりだなぁ。）
「どう責任をとるんだ！」
「…。」
（マリアンヌ？マリアンヌ？誰だ、それ…。）
「おい！」
「ん、ああ、ごめん。もう一回言ってくれる？」
「だからどう責任をとるのかと…。」
「いや責任も何も。もともと報酬目当てで、それをあげないでいいじゃ不満？それとも死ぬ？」
「うぐ…。」
「まぁ、今度は好きにやらしてもらうよ。相手が強かったのも事実だしね。」

（存在…。食べる…。マリアンヌ…。
坂井悠二…？彼は何者…？）

「結局は謎だらけか…。」
「？？」
「いや、ごめん。僕は少し休むよ。何かあったら声かけてねー。言うこと聞くかはその時に考えるよ。」
そう言ってフリアグネは、その部屋から出って行った。

第三十三話〜〜嘘んこ司教と狩人（後書き）

短いなぁ…。

※ハンドガン型の宝具の名前募集中、感想に書き込んでください！

第三十四話〜〜ルーンの真の力

手紙回収に来たルイズたちは悠二が普通ではない様子でどこかへ行ったこともあり、なかなか本題を切る出せず、やっと帰ってきたときにはもう深夜。
移動の疲れ、悠二は戦闘の疲れがひどかったため一夜、隠れ家に休憩、早朝に受け取りということになった。

「…外に出よう。」

フレイムヘイズということで雄二にこれといった睡眠欲はなく、かなりの時間をただ横になっていたが、さすがにじっとしているのも飽きた。

‘‘おはよう。’’
「うん、おはよう。って誰！？」

あまりに日常的なあいさつなため思わず返事をしてしまったが、声の主はルイズじゃないし、ワルドでも、まして『蛇』でもない。

‘‘こっちだよ。’’
「ん？」

周りを見渡してみたが誰もいない。ちなみに今は隠れ家の近くの庭先みたいなところである。

（ああ、ルーンか。）

‘‘きづいた？’’
「うん、ごめんね。」
何とも不思議な力だ、ちなみに声の主は近くの木の枝に止まっている小鳥である。
（ん？前までこんなことはなかったんだけどな？）
‘‘どうしたの？’’
「いや、考え事。で何か用かな？」
‘‘言葉が通じるようだから話しかけてみたの、あとは暇つぶしかなぁ？’’
「そっか。僕も暇だし少し話していようか。」
そのあと小一時間ほど談笑した後、悠二はルイズを起こしに向かった。
（なんというか、メルヘンだね。）

第三十四話〜〜ルーンの真の力（後書き）

真の力は動物との会話、頭の中では初代ヴィンダールブが従えていた動物を作ろうかと考えています。

※ハンドガン型の宝具の名前募集中、感想に書き込んでね。

第三十五話〜〜説得

早朝になりルイズを起こしに向かい、そのあとウェールズ皇太子から呼び出しがかかった。

「…ウェールズ様はどうなさるおつもりなのかしら？」
「たぶん、名誉がどうのこうので亡命なんてしないと思うよ。…、けどそれをやると確実に死ぬんだよね。」
「うん。」
「でその後、姫様が復讐に燃えてアルビオンを攻める、人が大勢死ぬ。」
「…、よくそこまで見通せるわね。」
「大局を見なきゃだめだよルイズ。一時負けても後で勝てばいいんだよ。」
「なら、意地でも亡命してもらうしかないわね。」
「そういうこと。説得は僕がやるよ、少しきつい言葉を使うけど口を挟まないでね。」
「わかったわ。いくわよ？」

その会話をした後ルイズと悠二はウェールズの部屋に向かった。…、ワルドは外を警戒しているみたいだ。

コンコンッ！
「どうぞ。」
「「失礼します。」」
「これが手紙だ。」
「確かに承りました。」

言ってルイズが自分の懐に手紙を収めた。

「ウェールズ様はこれからどうするおつもりなのですか？」

「…、戦争は残念だが勝ち目はない。和が軍は三百、相手は七万。我々にできることは勇敢な死に様を連中に見せるだけ。討ち死にする時は真っ先に死ぬつもりだ。」

「どうかトリステインに亡命してくださいませんか？姫様が愛した男性を見捨てるはずがありません。」

「僕とアンリエッタが恋仲と？確かに僕とアンリエッタは愛し合った仲だ。だがアンリエッタの恋文がゲルマニアの皇室に渡ったら婚約は破棄され同盟は成らず、トリステインは一国であの貴族派に立ち向かわなくてはならない。アンリエッタは王女だ。情に流され自分の都合を国の大事に優先させるはずがない。」

「…、死んだ後のことは考えているんですか？」

「後？」

「あなたが死んだ後姫様は必ず復讐に走ることになるでしょう、そうするとどうなるかわかりますか？

大勢の人が死ぬことになります。」

「…。」

「あなたが死んでその後、結果的に殺される人たちがかわいそうだとは思えないのですか？玉砕すればすべておさまるわけではないのですよ。ただでさえトリステインは落ちぶれ、アンリエッタ様も頼れる人がいないという状況なのに。」

「…。」

「死ぬというのが気軽な考えだとは言いませんが、先を見通してからそういうことは言って下さい。あなたの発言に大勢の国民の命がかかっているのです。」

「あと、少し時間をくれ。」

「わかりました。出ようかルイズ。」

悠二とルイズが部屋を出た後ルイズが口を開いた。

「あんた何でもできるのね。戦闘も説得も。」
「何でもはできないよ？世話はシイ任せだし。」
「私は何もできてないじゃないの。」
「そうだね、けどいつかできるようになるかもしれないよ？」
「いつかっていつよ？」

その後悠二とルイズは終始無言で時を過ごした。
（皇太子がどうするか…。ま、うまくいったとは思うんだけどね？）
（あれで亡命を選ばなかったらただの馬鹿だぞ？あの小僧はそこまで落ちてないと思うが？）

第三十五話〜〜説得（後書き）

死なせんよ、ウェールズ。
意地でも死なせんからな！

第三十六話〜〜嵐の前の…。

悠二とルイズが部屋を出た後、ワルドが話しかけてきた。
大事なことのようなので三人で客室に向かうことにした。

「…、で話ってなんですか？」
「…。」
「「？」」
「…ルイズ。」
「はい？」
「結婚しよう。」
「はい！？」
「えっと、おめでとうございます？」
「なんで疑問形なのよ！？」
「ここで結婚式をあげよう。」
「なんでここ、トリステインに戻ってからでも…。」
「仕事があるんでね、トリステインに戻ったら落ち着くまでずいぶんとかかると思うから。」
「あ、え、はい。」
「あー、僕は外にいることにします。」

何かいずらい雰囲気が漂っていたので悠二は外に出ることにした。
しばらく庭先でたそがれていると今朝がた話した小鳥が声をかけてきた。

‘‘物騒だねぇ。’’
「なにが？」

‘‘ここの兵士が知っているかは分からないけど…’’
「ん？」
‘‘ここから北の方向に何か軍勢がいるよ？軍の名前は…レコン・キスタだっけ？’’
「本当！？規模は！？」
‘‘わかんない。’’
「そう、ウェールズ様に知らせておいた方がいいかな？とりあえず君はできることならその軍勢に何か動きがあり次第知らせてくれる？危なそうならそこから離れてもいいよ。」
‘‘わかった’’

そういうと小鳥は北の方向に向かって飛んで行った。

「…、北の軍勢、結婚…。」
『あの騎士は本当に味方なのか？』
「ん？なんでそんなことを言うの？」
『あの騎士は、結婚を望んでいるというより…、そう、小娘の力を望んでいるように感じた。何にせよ警戒はするべきだ。』
「虚無…か。やっかいだなぁ～。いろいろこの世界も面倒なことが多いんだね。」
『そうだな。』

数十分後、ウェールズが悠二のそばにあるいてきた。

「！？ウェールズ様？」

「あ、いや楽にしていいよ。今は休憩を兼ねて連絡しに来ただけだし。」
「あ、はい。」
体勢を立て直そうとする悠二を止めたウェールズは、悠二の横に座って口を開いた。
「さって、ルイズ嬢とワルド殿の結婚式は今日の昼に行うことになった、結婚式には僕も立ち会うから、ぜひ君も参加してくれ。」
「はい、それと…。」
「なんだい？」
「虫の知らせ…、もとい小鳥の知らせなんですが、ここから北に行った方向にレコン・キスタの軍勢がいるらしいのです。」
「そうか…。」
「どうするんですか？」
悠二の質問に対しウェールズは軽く頭をかいた後、こう言った。
「そう…だな、トリステインに亡命するよ。」
「！」
「今は生きることに専念するよ、結婚式が終わり次第慌ただしいが、すぐに移動して何とか逃げ出す。」
「そうですか。」
「じゃあ、みんなにこのことを伝えてくるよ。」
「あの、ワルドさんには気をつけた方がいいかもしれません。」
「…、君がそういうのなら、きっとそうなんだろうね？それと、亡命のことは君がルイズ嬢達つたえておいてくれ。」
「了解しました。」
言った後悠二とウェールズは同時に立ちあがりそれぞれの目的の場

所に向かって歩き始めた。

第三十六話〜〜嵐の前の…。（後書き）

まぁこんなものでしょう、というか動物って何より勝る諜報部員だなw

※ハンドガン型の宝具の名前募集中、感想とともにどしどし書いてくださいね！

EX〜〜短編（前書き）

十月ぐらいまでかかると思っていたのですが、意外と早く落ち着くことができました。心配掛けて申し訳ありません。

今回はリハビリまがいの短編です、本編にも書いていますが時系列は気にしないでください。

EX〜〜短編

＊時系列は気にしないでください。＊

・―・―・―・―・―・―・―・―・―・―・

短編一話〜〜悠二と使い魔たち。

今悠二の周りはがやがやとうるさい、
いや普通の人から見ると動物に囲まれている、という状況だが。
青いドラゴンがきゅいきゅい鳴いたり、赤いサラマンダーがきゅるきゅる鳴いたりしている。

『おねーさまはひどいのね…。』
『ご主人様はまた男を…。』
『あー暇だなぁ…。』
「あのね、いつから僕は愚痴を聞く係りになったの？」

正直やかましくてかなわない、ルーンの力で語原化されているから、余計。

『あ、そういえばロビンが…。』
「ロビンって誰？…、ん、いやこの場合はどの子？」
『モンモランシーさまの使い魔ですな。』

「ん、ああー。でそのカエルがどうした？」
今悠二の頭に浮かんだ人物像は金髪縦ロール？のそばかすの女の子である。
ついでに肩に乗った紫色のリボンをつけたカエルのことも思い出す。
というかカエルが使い魔って、なんでもありか…。
『なんだかユージのこと怖がっているみたいだよ？』
「なんで？」
悠二の使い魔からの呼ばれ方は最初から『ユージ』である。
『いやこっちが聞きたいね、何かやったの？』
「んーいや、心当たりないかな？まずモンモランシーともあまり話さないし。」
大概話すときは、ギーシュがいるし、会話するのはギーシュメインで、横からモンモランシーが口を挟むだけである。直接話したことはもしかしたらないかもしれない。
「…、うん、全然分かんない。直接会ってみるしかないな。」
『そう？』
「うん、誰か呼んできて～。」
そう言ったらサラマンダーとフクロウの使い魔がどっかに飛んで行った。
「というか、この力こういう所は便利だな…。」
メリットもあればデメリットもあるんだなぁーっと悠二は思った。

十数分後に、フクロウが返ってきた

『えらいしぶっとりますな～～。』
「なんで関西弁！？…、違うそこじゃない。
しぶってるってなんでさ？」
『怖いとかなんやらしいっすわ。わてわようわかりませんわ～～。』
「ふぅん。」
（て言うか怖いってどういう…。）

結局そのカエル、ロビンが来るのはもう五分近くたってからであった。

「やぁ、ロビン。」
『え、ええ。』
「単刀直入に言うけど、なんで怖がられているのかな僕は？
怖がられるようなことはしてない…、つもりだけど？」
『あ、あなたが怖いんじゃないのよ！？けど、その、何かに睨まれているような…。
とにかく怖い視線を感じるのよ！』
「ん？…あ、っともしかして。」

そういうと悠二はおもむろに首からかけているネックレスをはずして手に持ち…、

（ごめん。）
（ぬ！？）
「ふっ！」

空に向かてぶん投げた。
何か空から『ぬおおおおお…！？』みたいな声が聞こえたがそこは華麗にスルー。

「どう？」
『あれ、視線が消えたわね？どうなってるのかしら？』
「んー、蛇に睨まれたカエル、か。」
『何の話よ？』

この後、ただ単にポケットに入れたらよかったのではないかと思ったが時すでに遅し。
ま、いいかで悠二はこの考えを終わらせたのであった。

EX〜〜短編（後書き）

一か月程待たせてしまって申し訳ありません。
次はちゃんと本編に戻りますね。

ご感想をいただけたら幸いです！

第三十七話〜〜結婚式、そして…（前書き）

んー、なんだかなぁ…。

第三十七話〜〜結婚式、そして…

悠二はウェールズと別れた後、自分たちの控室に戻った。
桃色？な雰囲気から逃げるように外に出たので一応ノックしたらワルドが出てきた。

「君か。」
「あ、はい、ウェールズ様からの伝言ですが。
今日の昼結婚式を行った後、すぐにここを放棄、トリステインに亡命する、とのことです。」
「あわただしいな？なにかあったのかい？」
「北のほうにレコン・キスタの軍勢を発見しました。」
「なるほど…。それはどうやって知ったのかな？」
「小鳥の知らせ、ですよ。ルイズはどこに？」
「ちょっと緊張してるようでね、今は二人にしておいてくれ。」
「わかりました、では。」
「ああ。」

控室から離れた後、悠二は口を開いた。

「今のタイミングでどうやって知ったか気にするかな？ここは規模とかじゃない？」
『怪しいな、たしかに。式中に何か起こるかも知れぬな。』
「ま、なんとかなるさ。一応つたえとこう…。」

そう言って悠二はどこかに歩いて行った。

・―・―・―・―・―・―・―・―・

時は過ぎて結婚式が始まる時間になった。
ここはアジト近くにある教会のようなところで、立会人をウェールズとして、周りを騎士が数人いる。
悠二は今ウェールズの右前のいすに座っている。
そしてウェールズが前にいる新郎と新婦、ワルドとルイズに向かって、言う。

「神と証人の目の前で新郎は新婦を妻にめとり
今日から将来にむけて、
良き時も、悪しき時も、富めるときも、貧しきときも、病める時も、
健やかなる時も、
生命ある限り、あなただけをだけを愛することを、誓いますか？」

「はい誓います。」
「…。」
「新婦ルイズ？」
「すいません緊張しているようでして…。もういちど「というかもういいでしょう？何ですかこの茶番は。」

かぶせるように放たれた悠二の言葉にワルドが固まる。

「いい加減にして下さいよ、ワルドさん。何をしたいのかはっきりして下さい。」
「何を…？」
「ルイズから思考が感じられない、何か薬でも盛ったんでしょう？」
「証拠はあるのかい？」
「レコン・キスタの軍勢が来たと言ったときにどうやって知ったかなんて言わないでしょう？
この結婚式も時間稼ぎが目的じゃないんですか？」

「じゃあ私が今からどうするかわかるかね？」
「ルイズの誘拐と、王子の暗殺？」
言った瞬間、ワルドが動き出した。
腰にさしたレイピア型の杖を抜き、ウェールズを狙ったが、悠二が
それを阻止した。

第三十七話〜〜結婚式、そして…（後書き）

短いし中途半端なところで終った…。
つ、次は頑張ります！

第三十八話〜〜閃光との戦い　前編

キィン！
レイピア型の杖と方手持ちの大剣がぶつかり、甲高い音が響く。

「ウェールズ様、ルイズをつれてここから離れて！レコン・キスタが来る前に逃げてください！」
「わかった！また後で会おう！」
「っち。」

悠二の声に反応したウェールズはルイズと騎士を連れてこの場から離れた。
そして二人は睨みあう。

「で、どうします？多分目的のうち二つはつぶしましたが。」
「ふむ、だがこのまま引くわけにもいかんのでな！」

ワルドの言葉とともに鋭い突きが飛んでくる。
それに反応して悠二は大剣で突きをはじくが次々に突きが連続して放たれていく。

「らちがあきません。」
「まったく。」

悠二は突きをよけ、あいた脇腹にけりを入れようとするが、バックステップで避けられる。
お返しと言わんばかりに、ワルドが魔法を飛ばしてくるがそれをジ

ャンプして避ける。
そのまま落下の勢いをつけてワルドに向けて叩き込もうとするとワルドは迎え撃つつもりなのか、レイピアの先端を飛んだ悠二に向けた。

「これで！」

声とともにレイピアの先から雷が出され悠二に向かう。
が、それを悠二は飛んで避けた。

「魔法が使えるのは聞いてないな？いや、あの異形な姿といい、君は本当に人間なのか。」
「魔法じゃありませんよ！」

勢いをつけて悠二がワルドに突っ込む、大剣をレイピアの横で受け止めるが、それがいけなかった。

「ふっ！」
「な！？」

大剣『吸血鬼』刀身に血色の波紋がゆれ、ワルドの右ふくらはぎが『切れた』
つばぜり合いをしている相手の体を存在の力を流しこむことによって切る。
それが大剣『吸血鬼（ブルートザオガー）』の能力である。
右ふくらはぎが傷つき、体勢が崩れた。
すかさず悠二は首を飛ばすつもりで剣を横にふるう。
そしてワルドの首が飛んだ。

『後ろだ！』

「ち！？」
「どういうことだ？」
「こっちが聞きたいです。」
後ろからワルドがレイピアを構え飛びかかってきた、それを悠二ははじく。
悠二は『ワルド』を見た後、『死んだワルド』をみた。
「あ、魔法か。分身かな？」
「正解だ。だが戦闘中によそ見とは余裕だね。」
そしてさっき死んだワルドがまた飛びかかってきた
それを悠二は避け、背中を切りつける。
「んー、本体がどこかにいると。」
「私かもしれないよ。」
「いや違うでしょう。僕から見たら二人とも魔力の塊ですから。」
そして悠二は手に炎弾を作りだし、聖堂の天井に投げつけた。
投げつけた炎弾は着弾した瞬間に大爆発を起こし天井を崩した。
天井が崩れ、連鎖的に壁も崩れ聖堂は完璧に破壊され、瓦礫の山となった。
「つぶれたか？」
天井を崩した時悠二はすぐに飛行の自在法を使い崩れてくる瓦礫をよけながら、聖堂の上空へ、完璧に崩れた後、瓦礫の山の中心に降りた。

「甘いな。」

その声が聞こえた瞬間、四方向から放たれた雷が悠二をとらえた。

第三十八話〜〜閃光との戦い　前編（後書き）

遅れてすいません。
戦闘描写は難しいなぁ…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8536s/

ゼロと創造の使い魔

2011年9月8日09時49分発行